

正 誤

本編第四頁第九行

第一八頁第十一行

第二六頁第五行

同 第十一行

第三〇頁第七行

同 第八行

第三二頁第十一行

同 第十三行

第四二頁第十二行

第四二頁第四行

第四八頁第四行

第四九頁第十行

第五三頁第十三行

第五四頁第九行

繼續ハ斷續ノ誤

大山祇女ノ下社下ヲ脱ス

たるにノ下より比叡山の延曆寺に日吉神を鎮守とせるにヲ脱ス

尊ノ下又ヲ脱ス

吾名ノ下是ヲ脱ス

我ハ吾ノ誤

齋ハ齊ノ誤

力自ハ刀自ノ誤

縁記ハ縁起ノ誤

建立ノ上社ヲ脱ス

正記ハ正説ノ誤

鎮守ノ下天仁坐ノ下天志天ハ誤

奪ハン奪ノ誤

△ハハノ誤

第五七頁第七行及十行

同 第十一行

第七九頁第十二行第十三行

第八二頁第七行ノ次

第八六頁第二行

第一五九頁第七行

第一六三頁第十行ノ次

第一七九頁第三行

同 第十三行

第二〇五頁第五行

同 第八行挿註

第二〇七頁第一行

第二〇九頁第三行

第二一〇頁末行

稻荷神三社ハ稻荷神社三座ノ誤

方角事ノ下口傳云近社自當時ヲ脱ス

共ニ一字低下

次自本殿北柱迄假殿南柱引廻内幕以下前同文ノ一項ヲ脱ス

修覆ノ下所ヲ脱ス

第八等ノ誤

稻荷旅所一行ヲ脱ス

十年ハ十二年ノ誤

稻荷神三社ハ稻荷神社三座ノ誤

加茂ハ賀茂ノ誤

天皇ハ上皇ノ誤

快ハ怪ノ誤

曆代ハ歴代ノ誤

午前九時遷御ハ符



第二二頁第五行  
第二四頁第十一行  
同 第十二行  
第二九頁第一行  
第三四頁第九行  
第三六頁第六行  
第二四五頁第五行  
第二五一頁第八行  
第二五六頁第一行  
第二六五頁第十二行第十三行  
第二七五頁第十一行  
第二〇四頁第十行  
第三三二頁第四行  
第三三三頁第十三行  
第三三六頁第六行  
第三五八頁九行

二月。十二月ノ誤  
此狀ハ此旨ノ誤  
幸ノ下給ヲ脱ス  
四月ハ四年ノ誤  
大夫ハ天文ノ誤  
毛奈ハ奈毛ノ誤  
差支ハ差文ノ誤  
挿註ハ衍  
卿ハ卿ノ誤  
滋井ハ滋野井ノ誤  
幸陵ハ慶幸ノ誤  
目錄ハ衍  
卿ハ朝臣ノ誤  
愚紳ノ下光房卿誌ハ衍  
愚紳ノ下紀光卿誌ハ衍  
今ノ下日ヲ脱ス

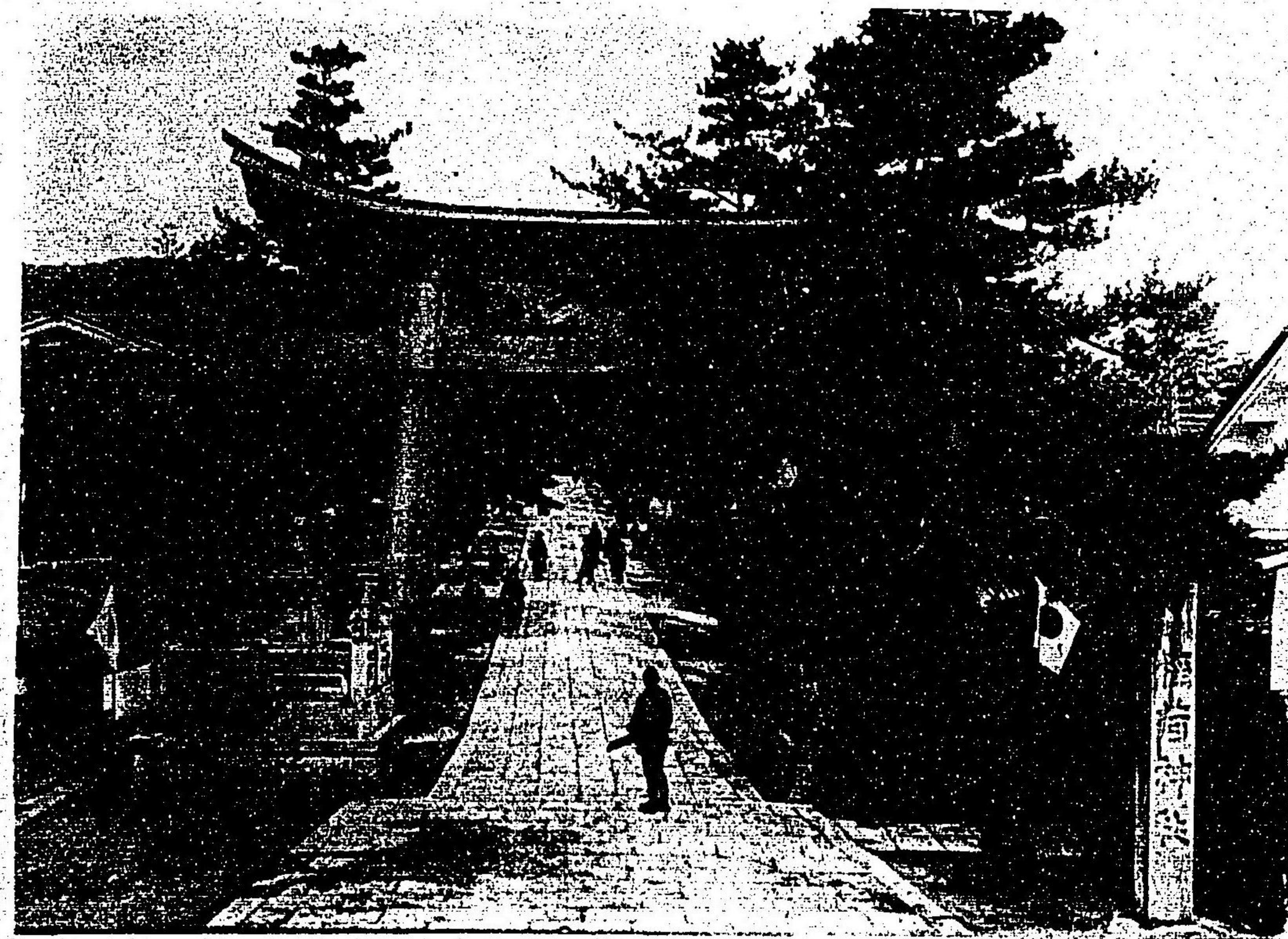
第三六一頁第一行  
第三六九頁第十三行  
第三七八頁第五行  
第三八三頁第二行  
第四二七頁第十一行  
第四三三頁第七行  
第四五一頁第七行  
第四八九頁第一行  
第五五三頁第二行第三行  
第五六四頁第八行  
第五七五頁第十一行  
第六〇一頁第三行  
第六〇七頁第十二行  
第七〇五頁第二行

渡米ハ渡來ノ誤  
中略ハ中ノ誤  
稱荷ハ稻荷ノ誤  
傳求ハ傳來ノ誤  
丁教ハ十穀ノ誤  
左衛ノ下門ヲ脱ス  
稻山ハ稻荷ノ誤  
六年ハ七年ノ誤  
三行共ニ一字低下  
大貴已ハ大已貴ノ誤  
業資ハ仲資ノ誤  
稻荷山ノ下上ヲ脱シ土人ノ下或  
ヲ脱ス  
堀河ノ下後ヲ脱シ忠房ハ兼昌ノ  
誤  
挿註ハ衍



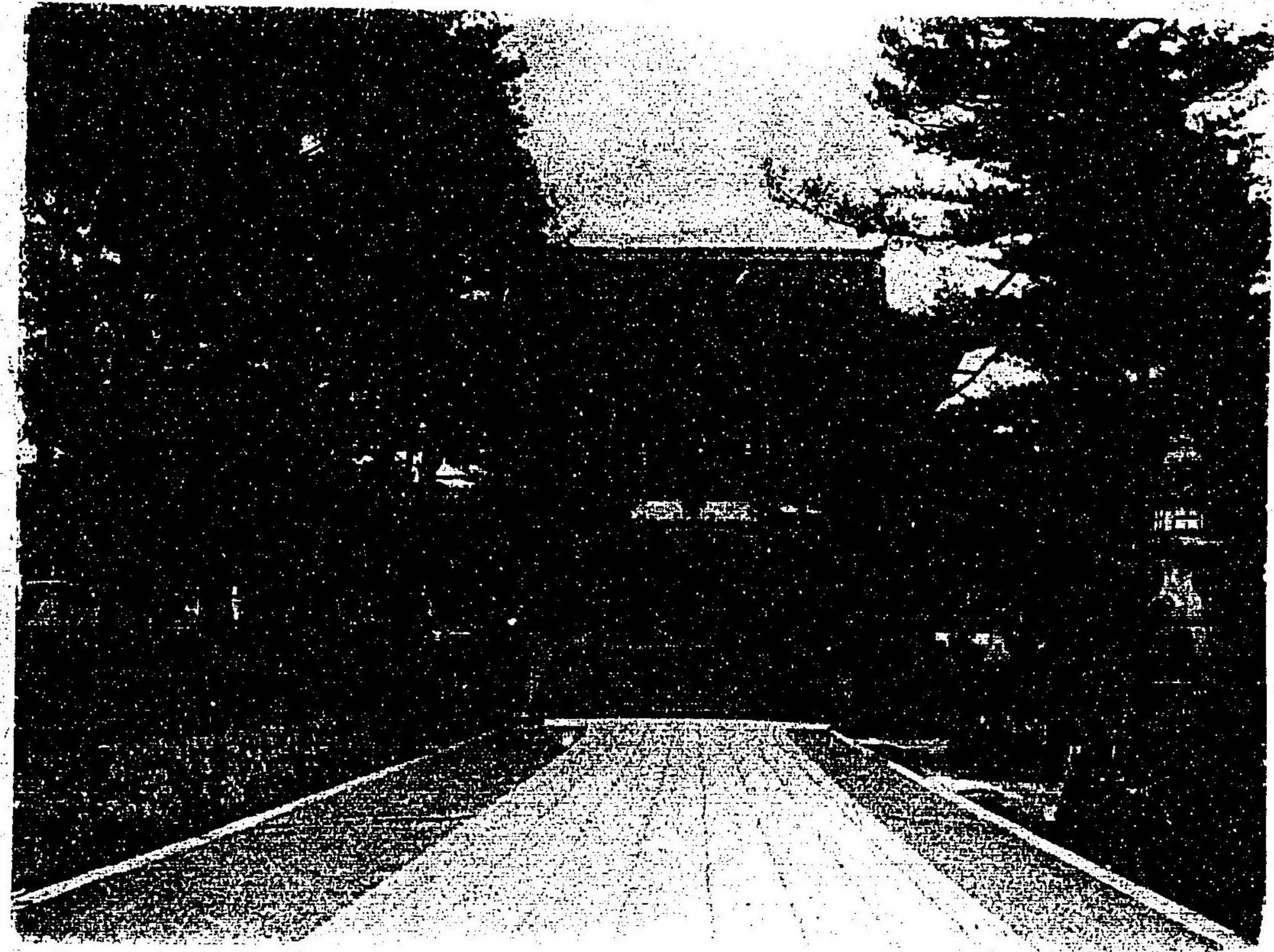
34-2687

表馬場





門 樓



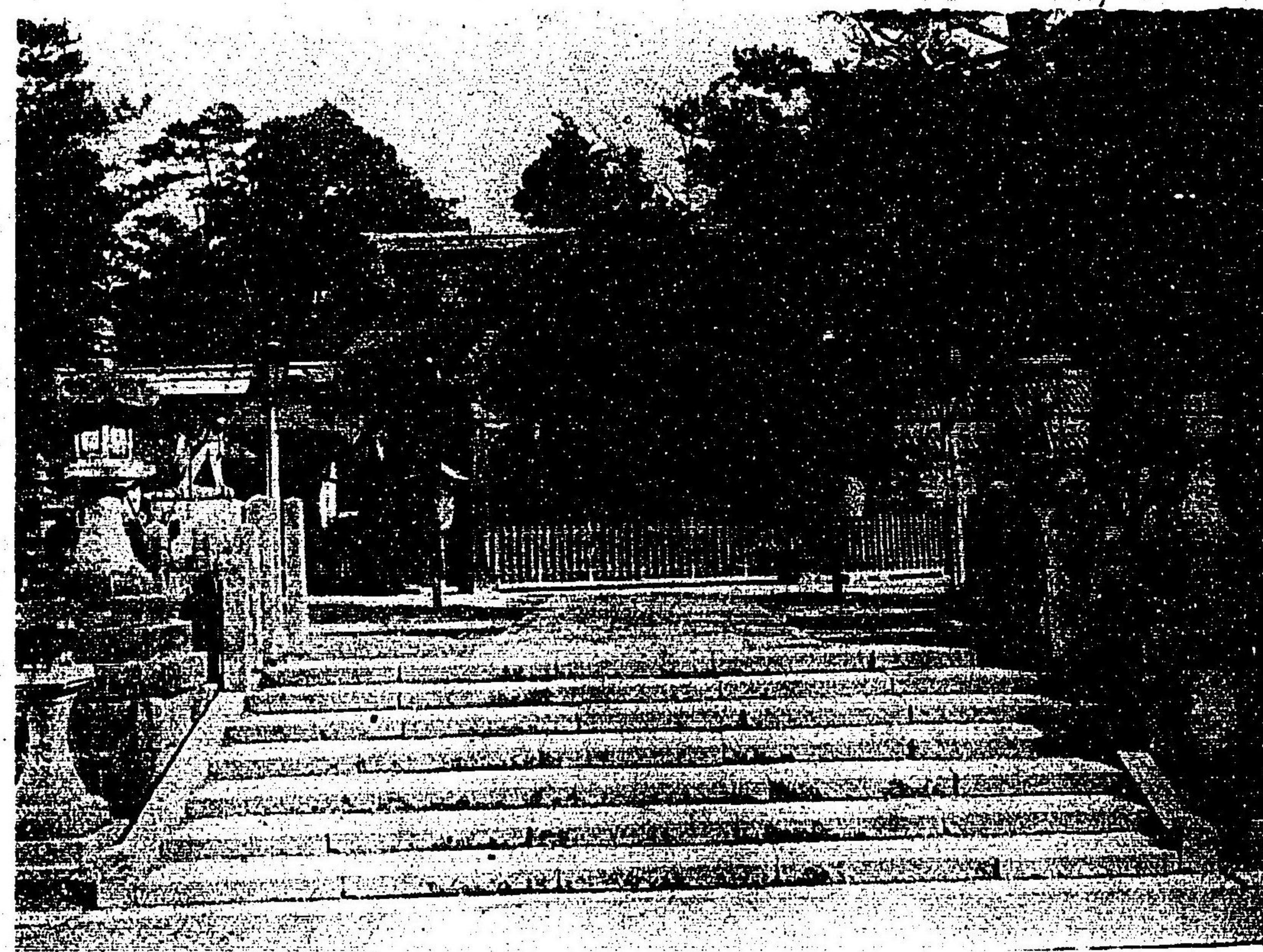


拜殿



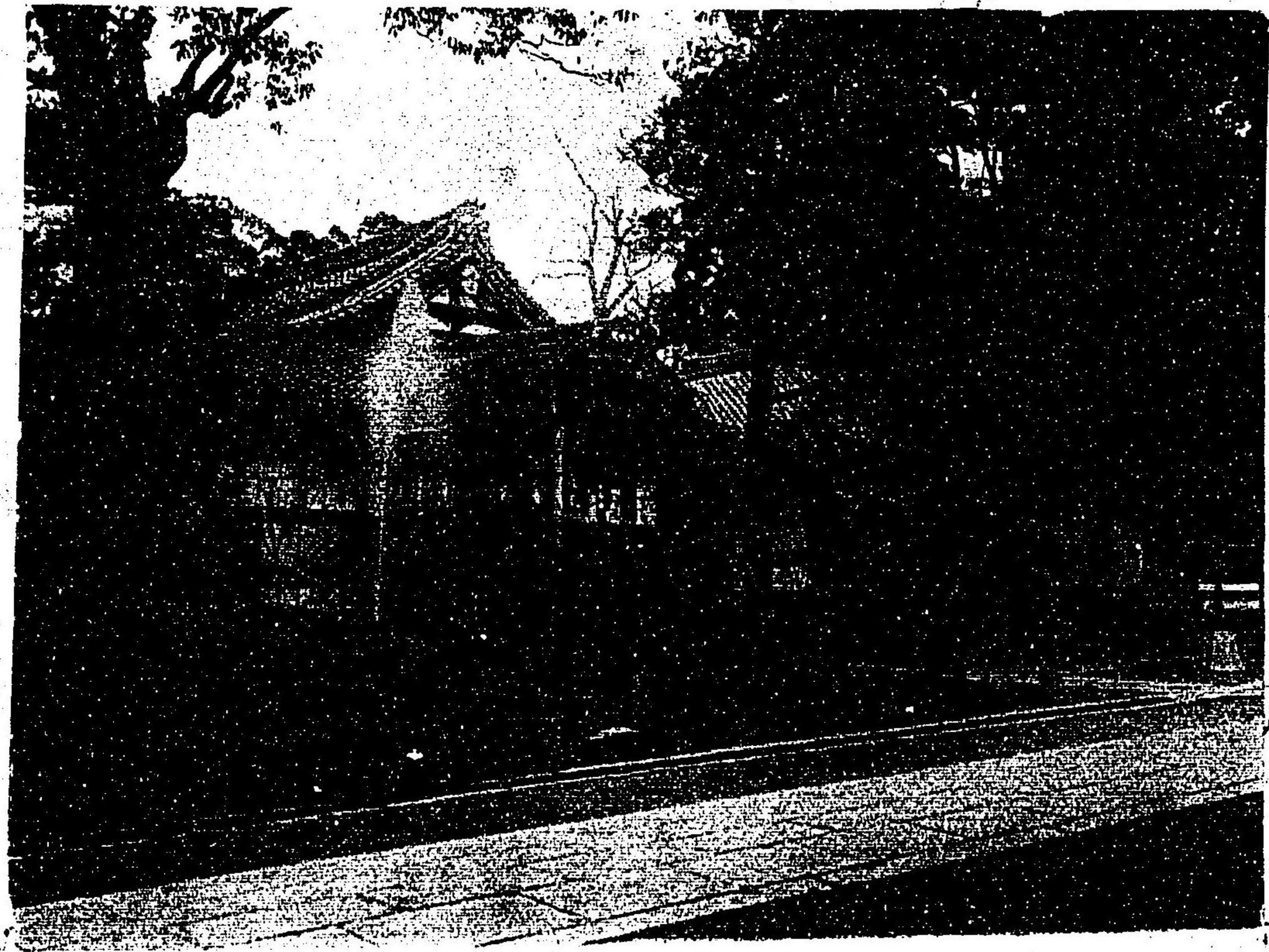


社 本



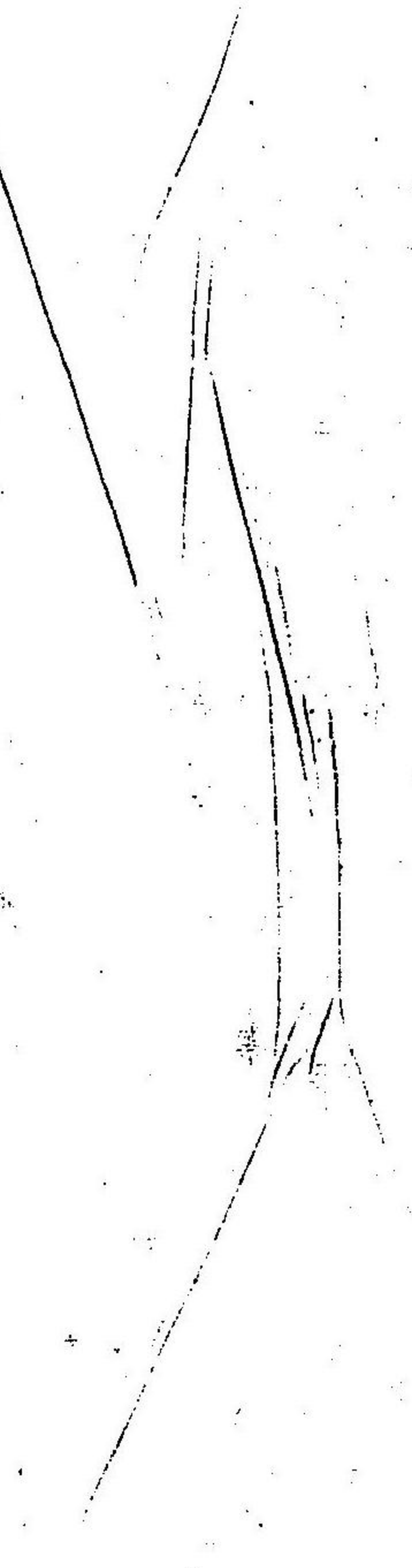
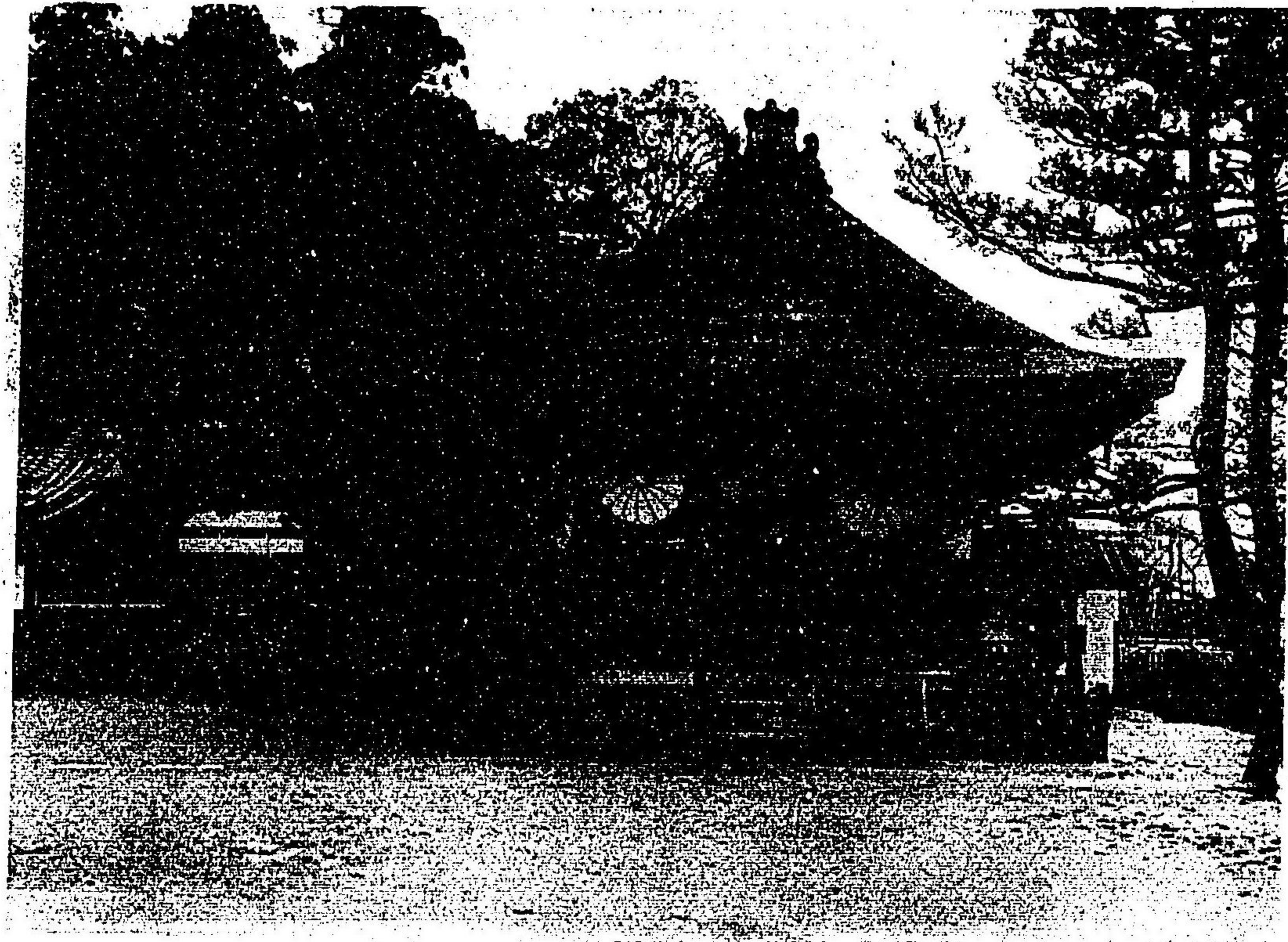


社務所



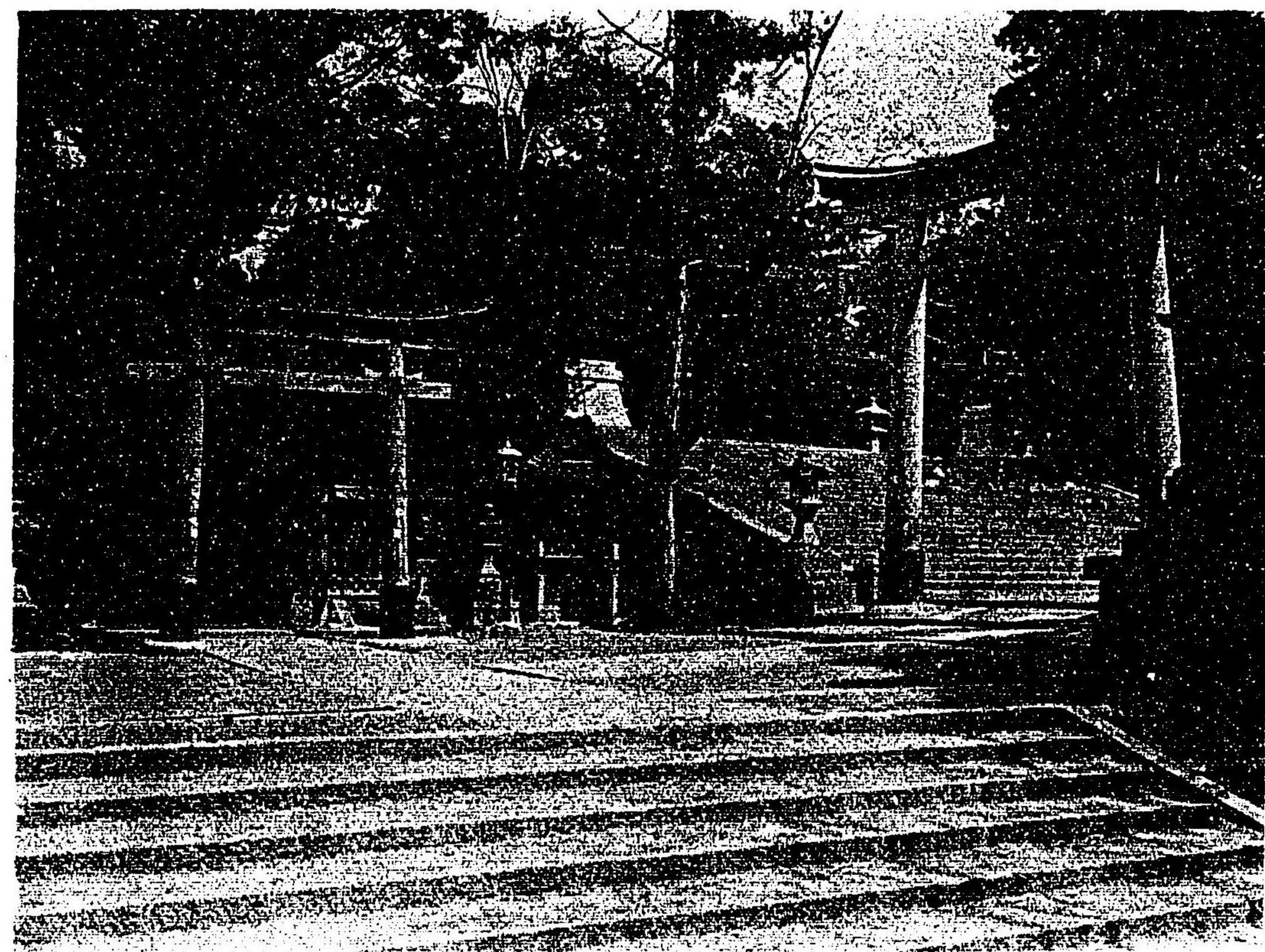


能樂殿



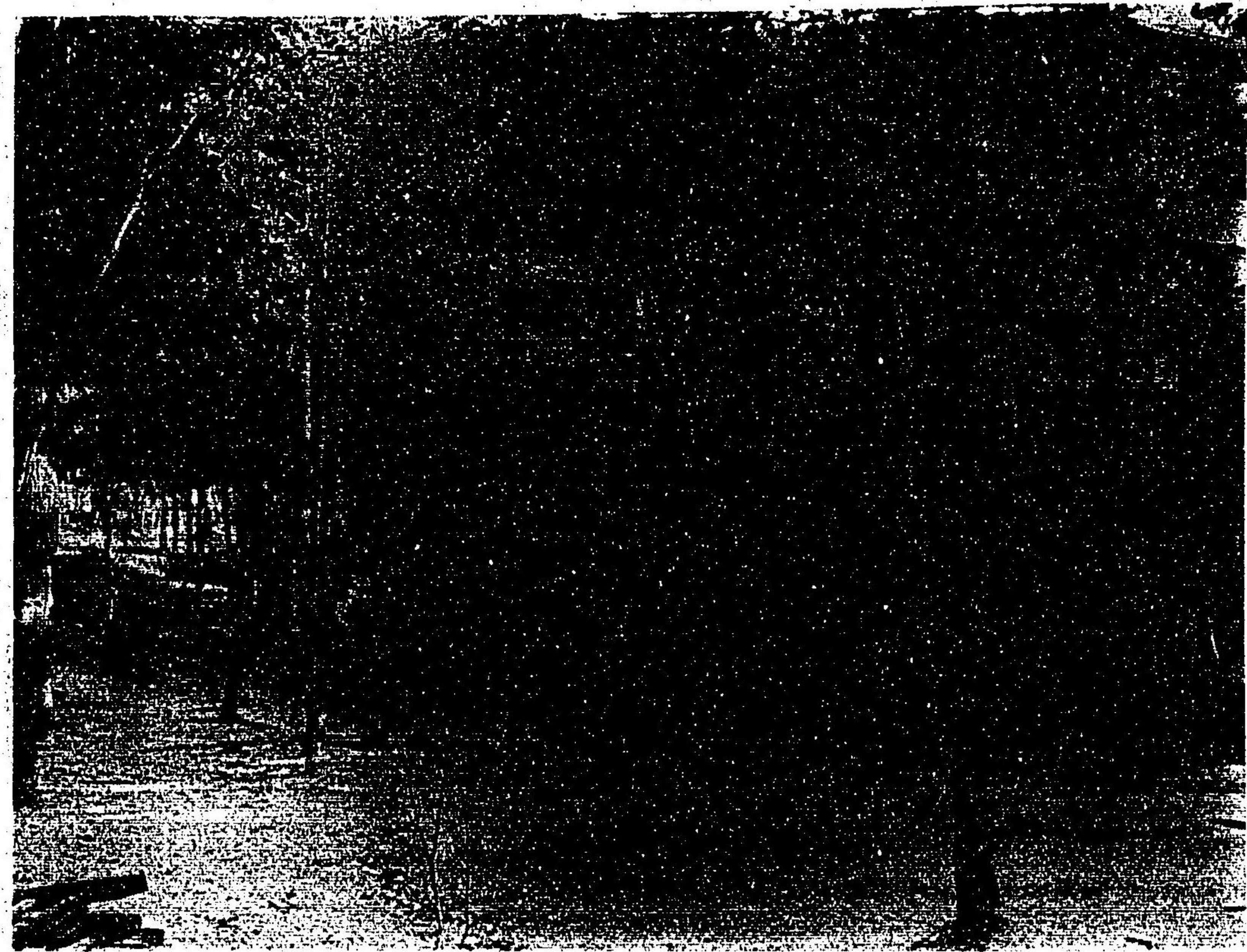


奥 宮



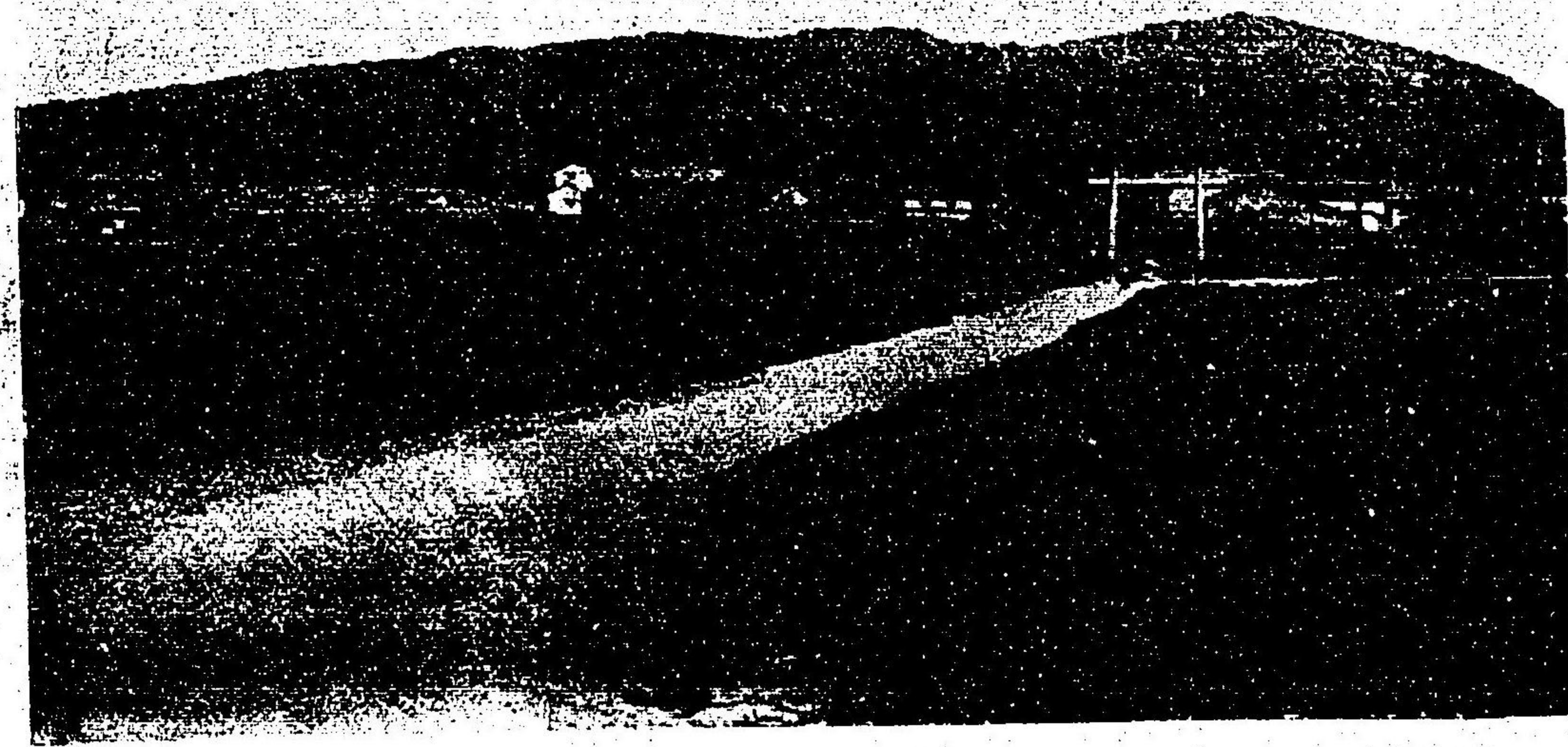


命婦谷





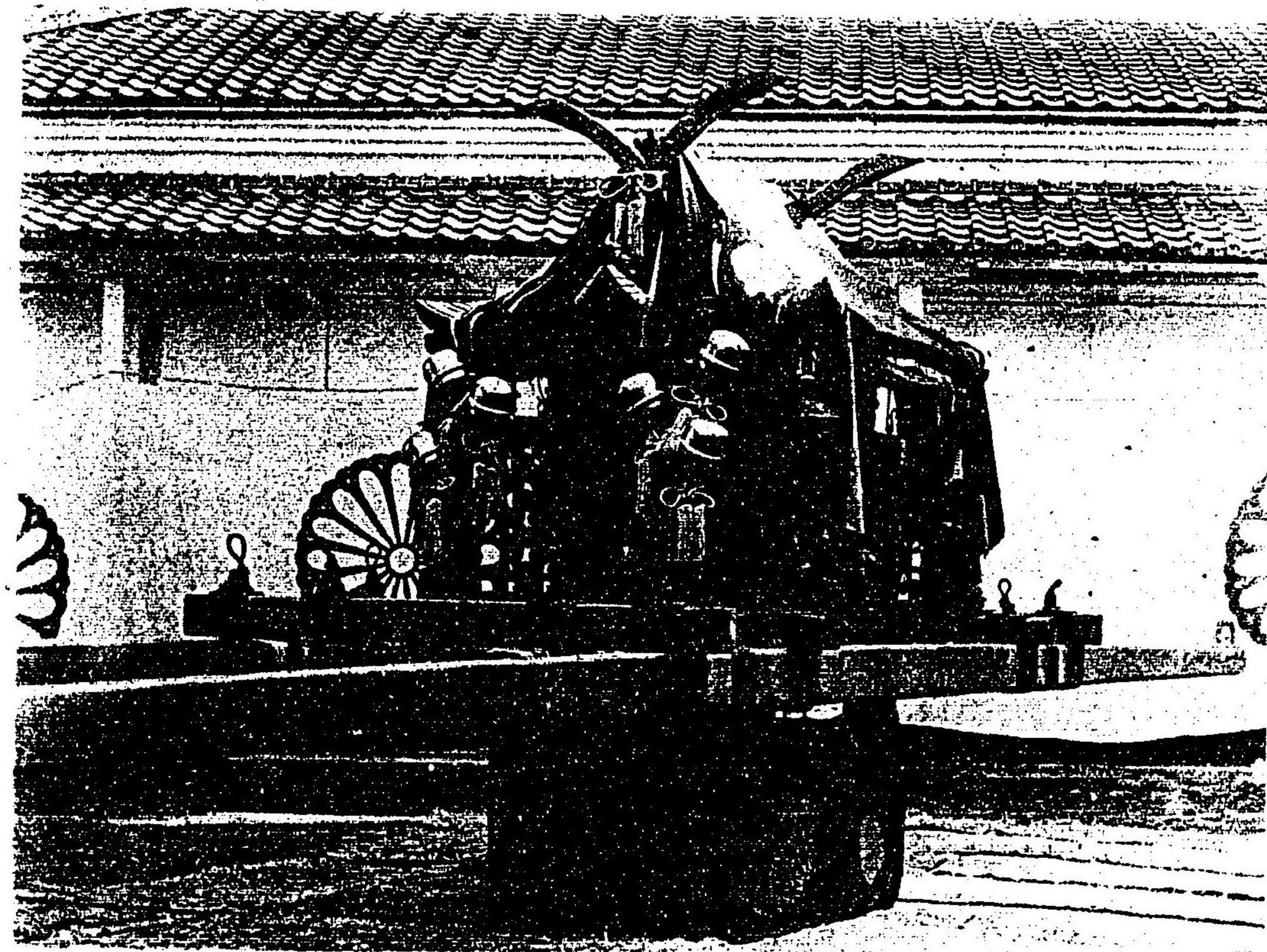
景遠山荷稻





中社神輿

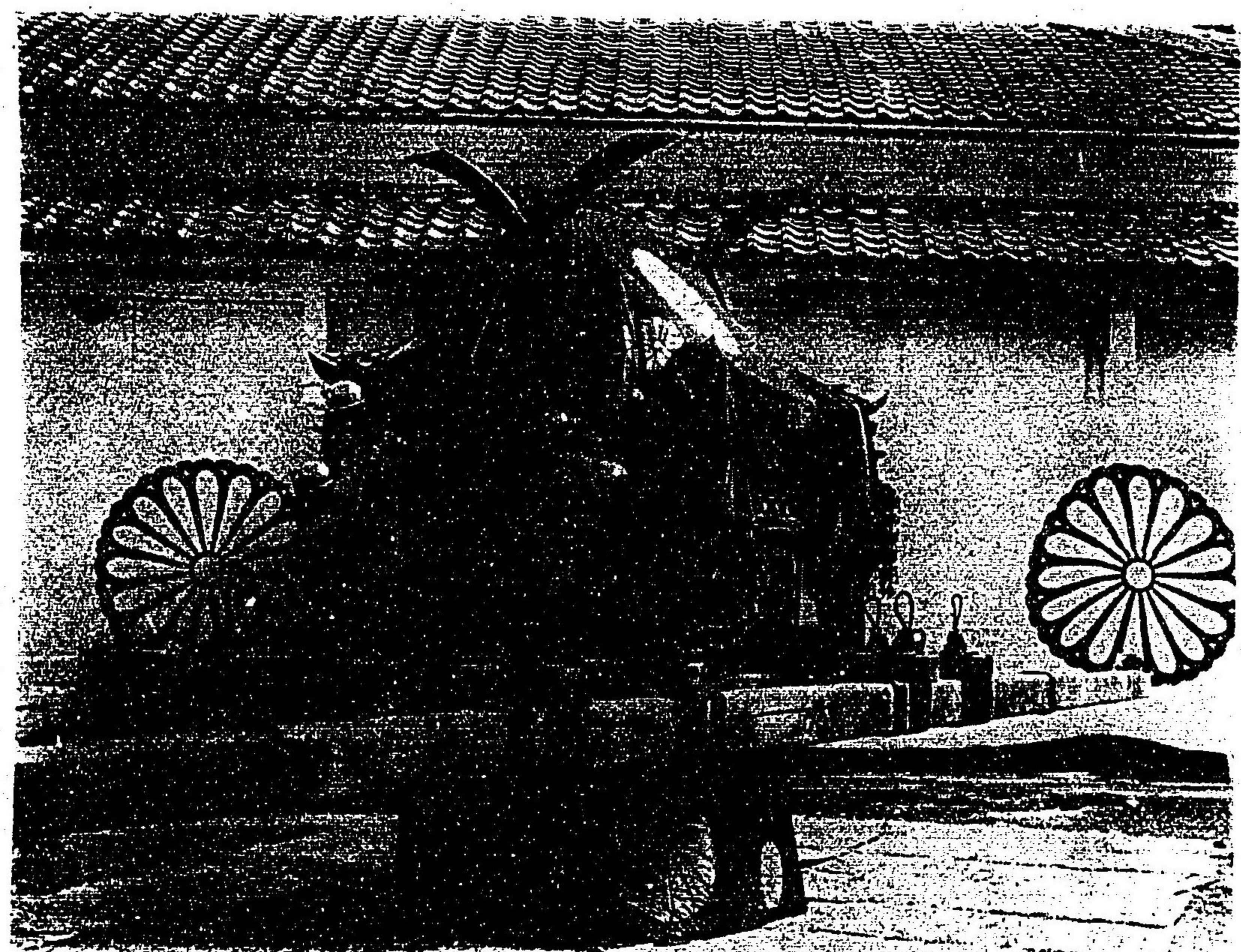
西九條受持





上社神輿

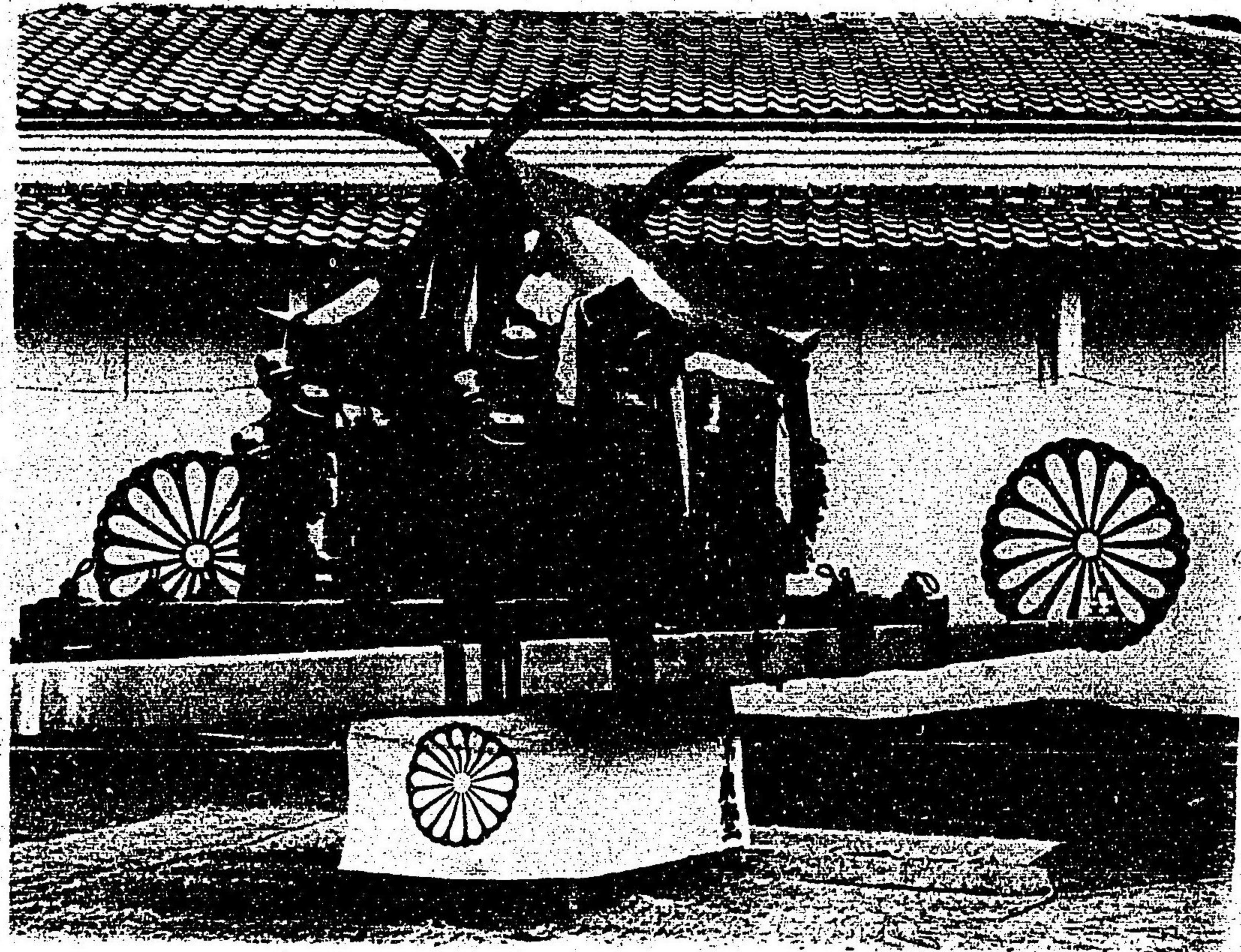
東九條受持





田中神社輿

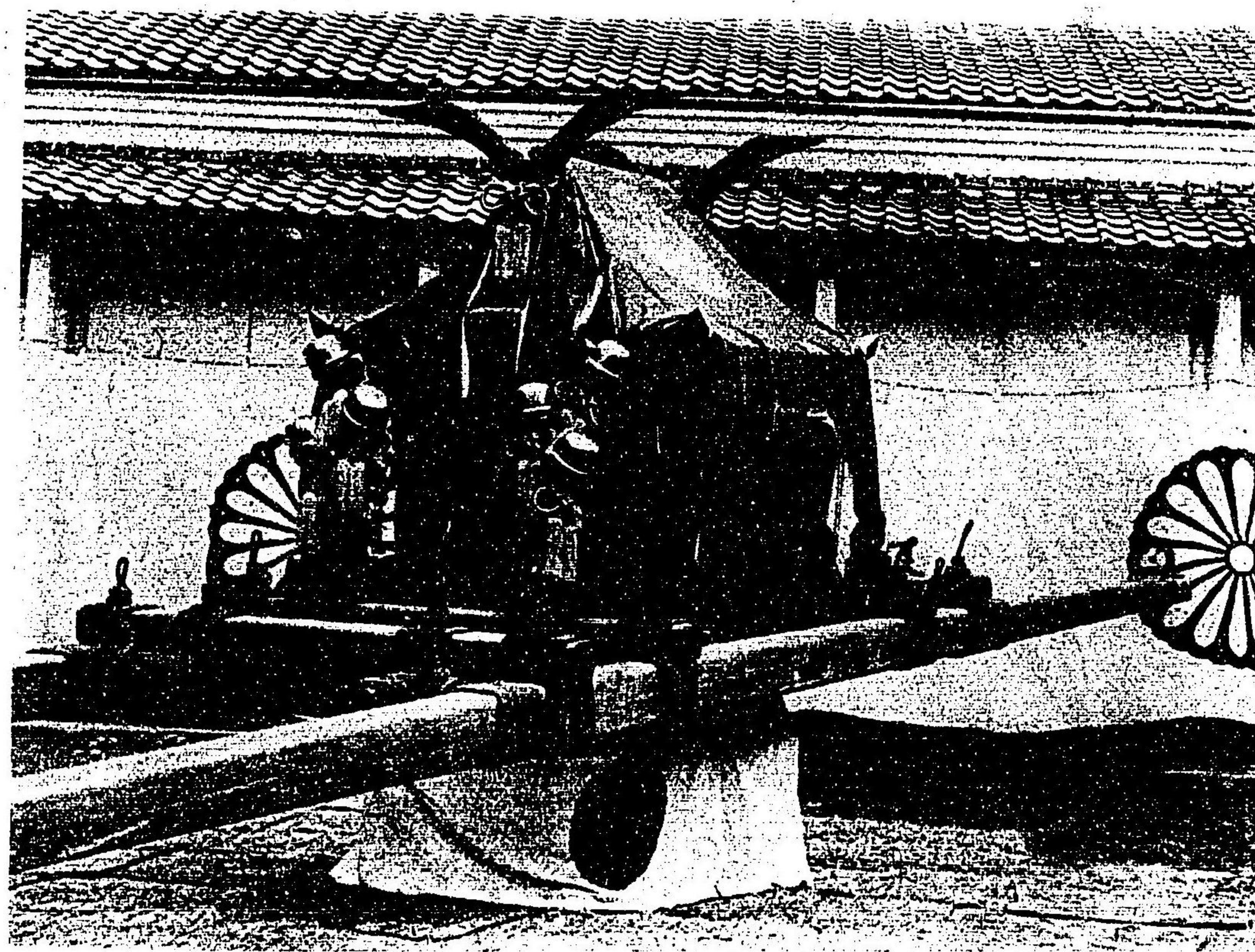
不動堂受持



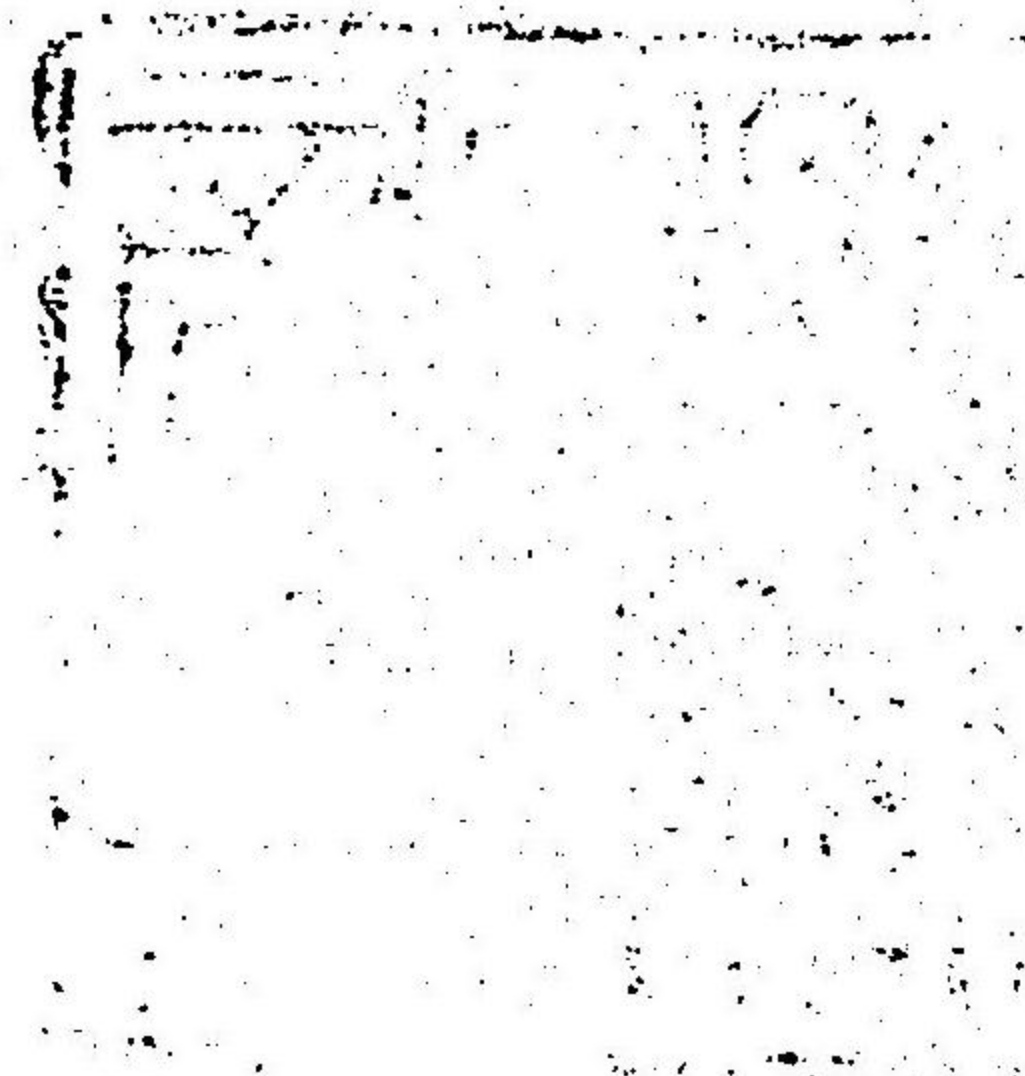


四大神輿

八條受持







一稻荷神社志料 一部

其神社ニ於テ編輯之

テ獻納候ニ付

差上候此段及通牒候

也



明治三十七年十二月十二日

宮内大臣子爵田中光顯

官幣大社稻荷神社宮司大貫眞浦殿

一稻荷神社...

明治  
43. 6. 27  
寄贈



別紙寫之通皇后宮大夫ヨリ被申越候ニ付及傳達候也

明治三十七年十二月七日

京都府知事 大森 鍾一

稻荷神社宮司大貫真浦殿

寫

一官幣大社稻荷神社志料

壹函

卷八

右同神社宮司大貫真浦ヨリ

皇后陛下へ献上志願之趣ヲ以テ御傳獻相成候ニ付  
御手許へ差上候處御留置被遊候間此段申進候也

明治三十七年十二月五日

皇后宮大夫子爵香川敬三

京都府知事大森鍾一殿



一稻荷神社志料

二部

右今般編輯二付

皇太子

同妃兩殿下へ献上相成即供

御覽候條此段申進候也

明治三十七年十二月十四日

東宮大夫齋藤桃太郎

稻荷神社宮司大貫眞浦殿



增訂 稻荷神社志料

緒言

嘗神社ハ古來著名ノ大社ニシテ、歷代帝室ノ崇敬及ヒ臣僚庶民ノ尊信最モ篤ク都鄙遠近ノ參拜者四時其蹤ヲ絶ズシテ、稻荷詣ノ稱呼久ク世ニ喧傳セリ、是レ實ニ神德顯著ニシテ靈驗偉大ナルニ由ルヤ敢テ多言ヲ須ズ、然ルニ應仁大亂ノ際兵燹ヲ罹テ、神殿堂宇ト共ニ古記悉ク燒燼シ、之ガ爲ニ由緒殆ンド湮滅シテ、復之ヲ詳傳スルモノ莫キニ至レリ、此故ニ世ノ學者著述家等、往々揣摩臆測、以テ杜撰附會ノ說ヲ傳ヘ、甚キニ至テハ浮屠氏ノ妄誕ヲ信シテ之ヲ敷衍スルモノアリ、其弊間、無識ノ徒ヲシテ祭神ヲ誤認シ、無稽ノ迷信ヲ生ゼシム、豈慨歎ニ堪ザランヤ、是ニ於テ本職深ク之ヲ愛ヒ、正確ナル社志ヲ編修シテ世ニ公ニシ、以テ祭神ヲ證明シ、神德ヲ顯揚シ而テ世人ノ迷想ヲ解キ、且社地社殿ノ沿革、及ビ祭奠儀式ノ典故其他上下尊信ノ事跡ヲ叙述シテ、大ニ真正敬神ノ感念



ヲ喚起セント欲シ、彌宜桑田孝恒、主典氷室銑之助、及ヒ常備竹村尙義ニ命ジテ、  
上ハ古事記、六國史ヨリ下ハ公私百家ノ著書記録ニ至ルマデ、泛ク涉獵搜索シ  
テ、苟モ當社ノ記事ニ關スルモノハ、細大トナク之ヲ蒐錄セシメ、而テ部門ヲ分  
ケ、類編シテ十有八門ト爲セリ、然ルニ古記既ニ湮滅シテ、復之ヲ討究スルニ由  
無ク、舊社家ノ記録ハ、皆應仁以後ノ叙事ニ屬シ、往古ノ傳説ニ至テハ、概テ其據  
ル所ヲ詳ニセズ、且搜索或ハ未ダ到ラザル所アリテ、猶多少ノ逸事無キヲ保ツ  
可ラズ、故ニ姑ク志料トシテ之ヲ存シ、徐ニ大方ノ裨補ヲ待テ、識者ノ翼賛ヲ得  
テ資料ノ完全ヲ期シ、而後本志ヲ大成セントス、且夫レ本書ハ、既ニ明治三十七  
年一タビ刊了シテ、乙夜ノ叡覽ニ奉供シ、及ビ大方諸彦、其他同職同學ノ間ニ頒  
ナシニ、爾來江湖ノ要求頻繁ニシテ、其中神社直接ノ緣故、或ハ公職ノ關係ニ於  
テ謝絶ス可ラザルモノ、尠カラズ、又近來新ニ得タル材料、若クハ前版ノ誤脱ヲ  
發見セル所ノモノモ亦多少之有リ、因テ是等ノ事項ヲ増補訂正シ、且年次ヲ延  
長シテ、明治三十九年十一月、新嘗祭奉幣ヲ以テ終尾ト爲シ、之ヲ第二版トシテ

刊行スルニ至レリ、抑本書ハ編輯ノ初ヨリ文學博士井上賴圀君ノ翼賛ヲ得、公  
私ノ諸記録ハ、概テ同氏ノ所藏ニ仰ギ、又白川家執奏留、其他日記類ハ、子爵白川  
資長君ノ厚意割愛ニ依テ之ヲ騰載スルノ幸ヲ得タリ、而テ田邊勝哉君、終始兩  
者ノ間ニ斡旋スルノミナラズ、諸事補助ヲ與ヘラレタルユト亦實ニ多大ナリ、  
因テ茲ニ一言ヲ加ヘ、併テ謝意ヲ表スト云爾、

明治四十二年九月

編者 識



## 凡例

- 一 此書ハ素ヨリ本志ノ資料ニ備フルモノナルガ故ニ、專ラ蒐閱拔抄スル所ノ記事ヲ列載シテ、其間苟モ編者ノ考説ヲ加ヘズ、然レドモ其記事錯綜シテ、現今ノ事實ヲ認得シ難ク、或ハ緣故來由ノ詳ナラザルモノ往々之アリ、故ニ卷首ニ是等ノ概要ヲ總説ス、
- 一 此書ノ記事ハ、和銅四年當神社鎮座ノ初ヨリ、明治三十九年ノ末ニ至ルマデ、之ヲ集載スルモノトス
- 一 諸書中記事ノ複雑、或ハ字句ノ錯置、假名ノ誤謬アルモ、總テ原文ニ從テ之ヲ載セ、妄ニ取捨改竄セズ、然レドモ年月日干支等ノ錯誤著キモノハ、編者ノ注意ヲ加フルコトアリ、
- 一 一書ニシテ數卷アルモノハ、每卷分載シテ、以テ參閱ニ便ス、
- 一 一巻ノ書又ハ同一ノ記事ト雖、部門ニヨリテ細目ヲ分ケ、或ハ年次ニ隨テ類



載スルモノ、若キハ其重複ニ拘ラズ之ヲ數所ニ分載ス、

一或記事ニ對シテ之ヲ説明シ、若クハ辨駁スルモノ、又ハ參照ニ供スベキモノノ類ハ其書名ノ上ニ△ヲ附シ、一段低下シテ之ヲ掲載シ、以テ主客輕重ヲ別ツ、

一編者ノ注意ヲ以テ挿註ヲ加フルモノニハ、( )ヲ附ス、

一記事ノ帝室朝廷ニ關係スルモノニ限り、年號ノ下ニ當代天皇ノ御名ヲ挿入ス、

一凡ソ記事ノ數部門相關聯セルモノ行幸、奉幣、祈請ノ類ハ、特ニ其首要ニ依テ之ヲ該部門ニ專載ス、

一各部門中、猶細目ヲ分ツモノハ、龍頭ニ其目ヲ掲グ、

一書ニシテ、數箇ノ名稱アルモノハ、其本書ノ表記ニ依テ之ヲ掲記シ、以テ照閱ニ便ス、

一祭禮行列圖ハ、其時代詳ナラズト雖、京都市下京區九條町田中良之助氏ノ所

藏ニシテ、安永三年、祭典再興以後ノモノナルベシト云、

一集載書目中、九歎私記、稻荷谷響記、稻荷山十二景記、稻荷社事實考證記、稻荷社古今事實考證、便蒙秘記、大西文書、羽倉文書、竈家年中行事等ハ、皆當社舊祠官ノ記錄ニ屬スルモノナリ、



集載書目

- |         |               |
|---------|---------------|
| 古事記     | 日本書紀          |
| 續日本紀    | 日本後紀          |
| 續日本後紀   | 文德天皇實錄        |
| 三代實錄    | 類聚國史          |
| 古語拾遺    | 本朝世紀          |
| 日本紀略    | 百練抄           |
| 扶桑略記    | 歷代編年集成一名帝王編年記 |
| 一代要記    | 歷代皇紀一名皇代曆     |
| 大鏡      | 增鏡            |
| 續世繼一名今鏡 | 今昔物語          |
| 古今著聞集   | 吾妻鏡           |



源平盛衰記

吉野拾遺

續史愚抄

古史傳

法成寺攝政記一名道長公記  
御堂關白記

爲房卿記一名大府記  
大記

長秋記一名師時記

台記

兵範記一名人車記

顯廣王記

吉記

明月記

岡屋關白記

平治物語

大日本史

古事記傳

小右記一名野府記

水左記

中右記

殿曆一名知足院關白記

台記別記

山槐記

玉葉一名玉海

仲資王記

三長記

平戸記

仁部記一名資宣卿記

康富記

建聖院內府記一名建內記

資益王記

宣順卿記

季連宿禰記

桂宮日記

兼胤公記一名八槐御記

紀光卿記

太政官日誌

荷田信友日記

荷田信鄉日記

秦忠熙日記

勘仲記一名兼仲卿記

薩戒記

親長卿記

忠富王記

方長卿記

後中內記一名宗顯卿記

賴言卿記

知音卿記

言成卿記

荷田信詮日記

荷田信名日記

荷田信邦日記

秦公府日記



- 秦公杓日記
- 荷田延重日記
- 荷田信資日記
- 荷田信義日記
- 稻荷神社記錄
- 稻荷神社古文書
- 羽倉文書
- 大和豐秋津嶋卜定記
- 諸神記
- 神祇正宗
- 神社啓蒙
- 神名帳考證
- 神名帳考證土代
- 秦公昌日記
- 荷田有信日記
- 荷田信興日記
- 社司月番雜記
- 稻荷神社社務所日誌
- 壬生家古文書
- 公卿補任
- 諸社根元記
- 神名帳頭註
- 神祇拾遺
- 本朝諸社一覽
- 延喜神名式比保古
- 神社覈錄

- 官社祭神考證
- 官社祭神記
- 二十二社本緣
- 藤森社緣起
- 驗の杉
- 稻荷社事實考證記
- 便蒙祕記
- 旅所由緒書
- 玉禰
- 元亨釋書
- 山城名所記一名洛陽名所集
- 菟藝泥赴
- 山城名勝志
- 神祇志料
- 二十二社註式
- 二十一社記
- 稻荷神社考
- 稻荷谷響記
- 稻荷社古今事實考證
- 稻荷神社由緒調書
- 官幣大社稻荷神社明細圖書
- 出定笑語附錄
- 山城國風土記
- 雍州府志
- 國花萬葉記
- 山州名跡志



山城志

山城名所寺社物語一名内裏雜

京羽二重大全

古風土記逸文考證

平安通志

蜻蛉日記

枕草紙

枕草紙春曙抄

更科日記

雲州消息

朝野群載

後拾遺和歌集

詞花和歌集

千載和歌集

續古今和歌集

夫木和歌抄

堀河百首

永久四年百首

新撰六帖

紀貫之家集

壬生忠見集

源順家集

散木弄花和歌集

袋草子

伊呂波字類抄

倭訓栞

延喜式

類聚符宣抄一名左丞抄

新抄格勅符抄

續左丞抄一名福家文書

宣秀卿御教書案

京都御役所向大概覺書

延寶檢地帳

西宮記

江家次第

師元年中行事

年中行事抄

年中行事祕抄

年中行事故實考

諸國年中行事大成

世諺問答

日次紀事

年中重寶記

竈家年中行事

安齋隨筆後編

濫觴抄

拾芥抄

和漢三才圖會

秦山集

滑稽雜談

長曆



○増補書目

- 保元物語
- 太平記
- 野史
- 皇年代私記
- 日本王代一覽
- 見聞雜記
- 春記
- 後二條關白記
- 清原重憲記
- 猪隈關白記
- 仁和寺日次記
- 經俊卿記一名吉黃記
- 平家物語
- 應仁記
- 十三代要略
- 續皇年代略記
- 重修王代一覽
- 左經記一名糸束記
- 平記一名行親記
- 永昌記
- 通季卿記一名永久五年遷幸記
- 業資王記
- 後鳥羽院宸記
- 葉黃記一名定嗣卿記  
葉禪記

- 吉續記
- 實躬卿記
- 東寺執行日記
- 師茂記
- 師郷記
- 後深心院關白記一名愚管記
- 御湯殿の上の日記
- 山禮記
- 長祿二年記
- 兼輝公記
- 基長卿記
- 資方朝臣記
- 愚紳一名紀光卿記
- 新抄
- 俊光卿記
- 師守記
- 師夏記
- 高大府記
- 延文四年記
- 看聞御記
- 管見記
- 堯恕法親王記
- 基量卿記
- 輝光卿記
- 幸充日次記一名日次醜滿
- 篤長卿記



- |         |            |
|---------|------------|
| 師贊朝臣記   | 公明卿記       |
| 忠言卿記    | 定祥卿記       |
| 實久卿記    | 輔世卿記       |
| 行通朝臣記   | 實麗卿記       |
| 資訓王記    | 白川家日記      |
| 白川家日次拔萃 | 白川家稻荷執奏留   |
| 東寺文書    | 大西文書       |
| 祠官系圖    | 新撰姓氏錄考證    |
| 萩藩閱録    | 東寺長者補任     |
| 神祇寶典    | 本朝神社考      |
| 諸國鎮座記   | 百社起源       |
| 二十二社參詣記 | 式社詣記       |
| 山城國式社考  | 稻荷神社御祭禮行列圖 |

- |                 |             |
|-----------------|-------------|
| 九歎私記            | 稻荷山十二景記     |
| 末社玉山神社遷宮略記      | 稻荷神社寶物目錄    |
| 東寺私用集           | 名所和歌方角鈔     |
| 京羽二重織留大全        | 日本鹿の子       |
| 西遊行囊抄           | 京都めぐり一名京城勝覽 |
| 日本風土記           | 二都巡見記       |
| 都名所圖會           | 都名所圖會拾遺     |
| 京羽津根            | 東海道俚諺拾譚     |
| 故實叢書中古京稻荷山及近傍地圖 | 日本地誌提要      |
| 扶桑京華志           | 大日本地名辭書     |
| ぬきふくろ日記         | 十訓抄         |
| 尺素往來            | 惠慶法師集       |
| 能宣家集            | 源道濟集        |



祭主輔親卿和歌集  
道助法親王家集  
拾玉集  
爲尹卿千首和歌  
近古歌集  
國史大辭典  
日本寺社領員數記  
官公事抄  
神祇官年中行事  
社司年中行事  
難波江

橋爲仲朝臣集  
金槐和歌集  
隣女和歌集  
歌枕  
和字正濫鈔  
諸社御朱印寫  
公事根源  
伯家部類  
華實年浪草  
盞囊抄  
古事類苑

目次

總說	一	頁
祭神	一	頁
鎮座	三	七 頁
社地	五	七 頁
社殿及建造物	六	九 頁
旅所	一	五 九 頁
神階	一	七 一 頁
社格	一	七 九 頁
神領	一	八 三 頁
行幸行啓及御幸附皇族御參拜	一	九 七 頁
奉幣附奉納	二	一 一 頁



祈請附神異	三〇九頁
祭禮附諸神事	三七七頁
初午詣附驗ノ杉	五三三頁
稻荷詣	五五七頁
攝社及末社	五六三頁
稻荷山舊跡附十二景	六〇一頁
祠官及附屬諸役	六一七頁
雜載	七〇三頁

訂增 稻荷神社志料

圖書寮編修官文學博士 井上頼国校閱  
官幣大社稻荷神社宮司 大貫眞浦編輯

總説

○祭神 謹テ按ズルニ當社ノ祭神ハ古來諸説頗ル多シト雖現今官幣大社トシテ奉祀スル所ハ宇迦之御魂大神中央社佐田彦大神北座大宮能賣大神南座ノ三座ニシテ延喜式所載稻荷神三社並名神大月次新嘗即チ是ナリ然ルニ中古以來攝社田中大神北座四大神南座ノ二社ヲ本殿ニ合祀シ祭禮モ亦同日祭禮勅裁案ト記セラレタルモノアリナルヲ以テ世ニ稻荷五社ノ名アリ又五社ニ奉幣ノ事アリ

○鎮座 元明天皇和銅四年二月始メテ伊奈利山三ヶ峰ニ鎮座セラレシユトハ諸書所載皆一ナリ但其日ヲ七日ト云ヒ或ハ九日ト云ヒ又ハ十一日ト云ヒ諸説殆ンド一ナラズ然レドモ初午詣ノ由來ヲ以テ考フルトキハ其初午ノ日ナリシユト復疑ヲ容レズ而テ長曆ヲ以テ之ヲ推スニ和銅四年二月初



午ハ、即チ七日午ヲレバ、蓋シ七日ヲ鎮座ノ日ト云フノ説正當ナラン、

○社地 伊奈利山三ヶ峰鎮座以來、全山殆シト境内ニ屬シ、其區域頗ル廣大ナリシガ、弘安年間東福寺創建ノ時、其幾部ヲ分割シ、爾後漸次減縮シテ現今ノ地積ト爲リ、多クハ國有山林ニ分屬セリ、又山上ヨリ今ノ地ニ移轉ノ時代ヲ考フルニ、舊社家ノ所傳ニ據レバ、永享十年正月、足利義教祈願ニ依テ之ヲ移セリト云フモ、他ノ諸舊記中、行幸御幸等ノ記事ニ由テ之ヲ觀ルニ、社頭ノ儀式頗ル莊重盛大ニシテ、到底山上狹隘ノ場裡ニ於テ行ハルベキモノニ非ズ、藤森社緣起、雍州府志、其他諸書ニ、弘仁年間、弘法大師ノ請願ニ依テ遷徙セリト曰フハ、或ハ妄誕ノ説ヲ雜ル所アリト雖、之ヲ諸舊記ニ對照スルトキハ、其時代ニ於テ頗ル信ヲ措クニ足ルベシ、畢竟正確ノ事實ハ、異日ノ考覈ヲ要スルモ、永享以前既ニ移轉シタル事跡ハ、蓋シ復疑ヲ容レザラン、

○社殿 鎮座以降二百有餘年間ノ沿革詳ナラズ、延喜八年ニ至テ、藤原時平三箇社ヲ修造セシユト始メテ諸書ニ見エ、其後二百八十餘年ヲ經テ、文治六年

修造ノ事、吾妻鏡ニ見エタル以來、修營年次稍明ニシテ、應仁ノ亂、再回兵燹ニ罹リ、明應八年再營ノ後、數次ノ修營ヲ經、現今ノ諸社殿ハ、天正十七年、豐臣秀吉ノ造營セシ所ナリ、而テ往古ハ、五社別殿ナリシモ、明應再營ノ時、合殿ト爲リ、以テ今ニ至レリト云、

○旅所 往古ハ、八條坊門猪熊、今所謂古旅所及ヒ七條油小路兩處ニ在テ、上旅所、下旅所ノ別アリ、其沿革、及ヒ今ノ地ニ移リシ時代詳ナラザル所アリト雖、舊社家ノ所傳ニ據レバ、天正年間、豐臣秀吉、故有テ之ヲ徙セリト云、是亦異日ノ考覈ヲ要ス、

○神階 淳和天皇、天長四年始メテ、從五位下ヲ授ケ奉ラレ、爾後累進シテ、朱雀天皇、天慶五年、正一位ニ陞ラル、而テ正三位ヨリ正二位ニ進マレタル年紀ハ、詳ナラズ、

○社格 仁明天皇承和十年、名神例ニ預リ、醍醐天皇ノ朝、延喜式制定ニ當リテ、名神大社ニ列シ、後朱雀天皇長曆三年、二十二社ニ加リテ、上七社ノ第六ニ位



シ、明治四年、官幣大社ニ列セラレ、

○神領 清和天皇貞觀七年、神田三段ヲ奉ラレ、爾後累加シテ、加賀山城、備後諸國ニ散在セシニ、天正十七年ニ至リテ、豊臣秀吉更ニ稻荷近傍ニ於テ百六石ノ神領ヲ奉納シ、徳川家康之ヲ繼承シテ、爾後累代朱印狀ヲ社司ニ授ケタリ、

○行幸行啓及御幸 行幸ハ、後三條天皇、延久四年ニ始マリ、順徳天皇、承久元年ニ止マリテ、其後ノ記事諸書ニ見エズ、行啓ハ、皇后宮、明治九年十月ノ一回ニシテ、御幸ハ、後白河上皇、壽永二年ニ始マリ、後嵯峨、後深草ニ上皇、弘長二年ニ止マリ、其後ノ事詳ナラズ、

○奉幣 文徳天皇仁壽二年、祈雨ニ始マリ、爾後歷朝繼續以テ今ニ至ル、而テ諸書ニ、二十二社若クハ七社奉幣、又ハ祈年穀奉幣ト記セルモノハ、皆當社モ其列ニ在リシヲ疑ハズト雖、此書ニ列載スル所ハ、特ニ社名ヲ明記セルモノ、ミトス、

○祈請 朱雀天皇天慶元年、震災ニ對スル勅禱ヲ初トシ、特ニ祈禱ノ明文アル

モノ、ミテ載セ、之ニ對シ奉幣ノ文字アルモノハ、總テ奉幣ノ部門ニ登載ス、

○祭禮 往古ハ勅祭ニシテ、神幸當日三月第二午日、俗ニ渡御祭、又御輿迎ノ儀アリ、而テ神輿旅所ニ駐マルユト二十日ニシテ、四月第一卯日、若クハ第二卯日、三卯日ヲ用還御ノ後、祭典ヲ行フ、之ヲ稻荷祭ト謂フ、當日ハ勅使及ヒ皇后宮、東宮ノ御使參向アリ、儀式最モ嚴肅ナリト云、然ルニ中古年代未詳以來、毎年勅裁ノ繪旨ヲ神祇伯ニ下シテ、祭典舉行ヲ社司ニ委セラル、例トナリ、爾來勅裁祭ト稱シテ、神幸ノ途上、繪旨ヲ鹵簿ノ中央ニ奉シ、通輿ノ街衢ニ警固ノ司吏ヲ配置シテ、威儀嚴正ナリ、維新ノ後、明治六年ニ至テ、祭政改革ニ因リ、繪旨下賜ヲ廢シ、四月九日ヲ以テ例祭ト定メラレ、地方長官參向シテ、奉幣奠享ノ儀ヲ行フコト、ナリ、神幸還幸ハ一社ノ私祭ニ屬シ、且改曆ニ因テ、神幸ヲ四月第二還幸ヲ五月第一ト變更ス、然レドモ、稻荷祭ノ名ハ依然トシテ、現存シ、式典鹵簿等荷モ變替スルコト無シ、又五基ノ神輿ハ、古來著名ノ美觀ニシテ、本邦無比ト稱シ、其構造及ヒ裝飾物ハ皆優逸ニシテ、金具ノ彫刻、織物ノ繡彩



等ハ概ネ名工ノ作ニ成リ、總テ金色燦爛トシテ人目ヲ眩ス、而テ一基ノ昇丁、殆ンド三百人ヲ要スルヲ以テ、其構造裝飾ノ偉大ナルヲ知ルベシ、抑モ神輿ノ昇丁、及ビ修繕等ハ、由來五箇郷不動堂(田中社)東九條(上社)鹽小路(中堂)寺交番(下社)西九條(中社)八條(四大神)ニ於テ分擔スル慣行ニシテ、其緣故詳ナラズト雖、口碑ノ傳フル所ニ據レバ、應仁兵燹ノ際、右等ノ郷民、各神輿ヲ奉昇シテ其禍ヲ避ケタルニ起因スト云、諸神事ノ中、大山詣、一名注連張神事ハ、往古山上鎮座ノ時、御膳谷ニ於テ神饌ヲ調供セシ遺典ナルコト諸書所載ノ如シ、然レドモ其之ヲ正月五日ニ於テ行フ所以ハ、永享十年山麓ニ遷座ノ當日ナルニ因ルト云、傳説ハ、果シテ眞ナルヤ否ヤ、社地ノ項ニ説ケルガ如ク、遷座ノ年次未ダ詳ナラザレバ、此ノ緣故ノ所傳モ亦直ニ信憑スルコト能ハズ、又現今奠供ノ土器ヲ競争拾得スル狀態ハ、實ニ近年來ノ慣習ニシテ、舊時ハ儀式整肅、參觀者今日ノ如ク喧躁襍鬧セシコトナシト云、

奉射祭ハ、其起原詳ナラズト雖モ、儀式頗ル嚴正ナリ、而テ往古ハ正月十三日

ナリシニ、舊神官概ネ非藏人職ヲ兼ネ、當日ハ宮中參賀、及ビ搦紳家廻禮ノ要務アリテ、神事執行ノ遲緩ヲ免レザルガ故ニ、便宜ニ依テ前日之ヲ行フ例ヲ生シ、因習久キテ經テ寶曆五年以降遂ニ自ラ變シテ十二日ノ定例ト爲リ、以テ往昔今日ニ至レリ、

○初午詣 初午ノ稱呼ハ、實ニ當社大神始メテ鎮座ノ日、即チ和銅四年二月七日壬午ニ起因スルモノニシテ、素ヨリ定式ノ祭典ヲ行フト雖、此日ハ衆庶ノ參詣殊ニ多キヲ以テ、古來此名稱アリ、而テ嘗ニ當日ノミナラズ、毎月午日ニハ、其前宵ヨリ遠近ノ參詣者陸續其蹤ヲ絶ズ、近年來崇信者益々多キヲ加ヘ、神德彌々顯著ナルヲ知ル、

驗の杉ハ、當社鎮座ノ因緣山城國風土記所載、按社之木殖ヨリ、奉幣、其他神事等

關係頗ル深ク、殊ニ初午詣ニ關シ古來最モ著名ナリ、故ニ之ヲ該部門ニ附ス、而テ今ハ之ヲ以テ屋上ヲ葺キ、又ハ之ヲ頭間ニ挿スガ如キユトハ止ミタリト雖、參詣者ノ要求ハ依然トシテ絶エズ、



○稻荷詣 例祭、及ビ初午詣ノ外、搢紳名臣等ノ特ニ參詣スル者多キニ對シテ、古來此名稱アリ、

○攝社及末社 攝社ハ、本社ニ合祀セル田中社二社ノ外、境外ニ一社アリ、末社ハ、境内ニ十二社、境外旅所ニ二社アリ、而テ境内末社白狐社ハ、舊記ニ所謂命婦社ニシテ、寛文年間故アリテ、今ノ名ニ改マレリト云、今日世人ノ命婦社、又ハ奥院ト唱フル所ノモノハ、一ノ供物所ニシテ、其命婦谷ノ奥ニ在ルニ由テ訛傳シタルモノナリ、

○祠堂 神主、禰宜、祝ノ外、御殿預正、目代正ノ兩職アリ、而テ神主以下ハ、秦姓十家ノ内之ニ撰任セラレ、御殿預、目代ハ、荷田姓四家世襲ヲ以テ之ニ補セラル、抑兩姓共ニ當社鎮座以來ノ舊家ニシテ、其緣故來歴實ニ深長ナリ、故ニ明治三年神祇官ニ呈出シタル諸家系圖ヲ騰載シテ、其系統ヲ明ニシ、累代補任ノ事歴ハ之ヲ省略ス、

○稻荷山舊蹟 山上神蹟七所及ビ山下ニ大八島神蹟一所ノ外、古歌、及ビ諸書

ニ散見セル所ノ舊蹟中、現今殆ンド湮没シテ尋ヌ可ラザルモノ房崖、僞、正アリ、或ハ當山ノ域外ニ轉屬セルモノ車坂、還坂ノ若キハ、今アリ、東福寺山ニ屬セリ、



祭神

○二十二社註式

二十二社

稻荷社

延喜神祇式曰山城國紀伊郡稻荷神三座

下社 大宮女命伊弉冉尊化神也

中社 稻倉魂命神播百谷神也一名豐字氣姬命大和國廣瀨大明神

上社 猿田彦命三千世界地主神是也

△官社祭神記上

稻荷神社

所祭神三座

倉稻魂命亦名大宜都比賣神亦名保食神

蓋猿田彦命也乎



蓋、大宮女命也乎

中社即本を倉稻魂命とせしは諸書大概同じ○上社註式に猿田彦命とあり、また土祖神と云ふ説もあり、今云、古史傳に、大土神、一名大土之御祖神は、猿田彦神の別名なる由論はれたり、其説の如くなる時は、いづれにても同じ事ぞ、○下社註式に、大宮女命とあり、

古史傳十二

稻荷神社は、註式に、下社は、大宮女命、異本に、大宮命婦、中社は、稻倉魂命、播百谷神也、一名、豊字氣姫命、○鐵胤云、谷は、穀上社、猿田彦命とあるは、よく事實に符ひて、後人のおしめてに思寄るまじき説なり、

玉釋三

さて伊勢の外宮の餘にも、此大神豊字氣命を祭れる社は、國々に多かるが、中に山城、國紀、伊郡に坐す、稻荷神社三座並名神大とある御社も、古書どもに、宇迦之御魂命、猿田彦命、大宮賣命とありて、宇迦之御魂命を主と祭れり、  
△古事類苑神祇部六十八

稻荷神社

○按ズルニ、社殿條ニ引ケル二十二社註式ニ據レバ、稻荷神ハ、元明天皇和銅四年ニ、秦公伊侶具ノ始メテ祀ル所ニシテ、其初ハ一座ナルガ如シ、然ルニ神階條ニ引ケル、文徳實錄、天安元年ノ文ニ、始メテ稻荷神三座ト見エタルハ、是ヨリ先ニ二座ヲ加ヘタリシモノカ、此三座ハ、或ハ倉稻魂命、大宮女命、猿田彦命トシ、或ハ倉稻魂神、素戔鳴尊、大市姫命トシ、其他異傳頗ル多シ、

官社祭神考證

稱荷神社三座

祭神 倉稻魂命 猿田彦命 大宮女命

平安通志三十一

稻荷神社式内

上社、大官能賣大神、中社、佐田彦大神、下社、宇迦之御魂大神ヲ祭ル、

官幣大社稻荷神社明細圖書



一 祭神

中央下社 宇迦之御魂大神舊神官ノ傳ニ、級長戸邊命、級長津彦命ヲ合祭スト云ルハ、恐ラクハ誤傳、

北座中社 佐田彦大神須佐男大神トモ、又ハ、舊神官ノ傳ニ、瓊瓊杵命トモ、保食神トモ云ヘリ、

南座上社 大宮賣大神大市姫大神トモ、又舊神官ノ傳ニハ、伊弉册命トモ、稚産靈命トモ云ヘリ、

○延喜式神名帳頭註

山城紀伊郡

稻荷 本社倉稻魂神也、此神素戔烏女也、母大山祇神、女大市姬也、倉稻魂神、播百穀神也、故名稻荷、歟、伊弉諾御女、此名有之一座素戔烏、一座大市姬也、祕中之祕也、以上三座也、(山城名勝志 所載亦同)

○神祇拾遺

稻荷社本縁

本殿 宇賀御魂父大地主素戔烏、母大山祇、女大市姬、又豐宇氣傳有之、

第二殿 素戔烏亦大祖神トモ云フ、

第三殿 大市姬亦大宮命婦トモ云フ、

已上祕祕中甚深事也、

△素戔烏尊ノ御子宇賀魂神ハ、伊勢調御倉神、稻荷等是ナリ、

△倭訓栞前編三 伊

いなり 神代紀に、保食神の腹中生稻と見えて、稻生の義なり、稻荷と書に据ば、もとはいなにといひし成べし、にとりと通ず、榊井を、古事記に、苅羽井と見えたるごとし、一説に、此山の地主の神を荷田の神といふ、後に倉稻魂を祭れりともいへり、されど文徳實錄に、稻荷神三前と見えたり、本殿は倉稻魂、第二殿は須佐之男命、第三殿は大市比賣也と傳ふ、

△稻荷神社考上

山城國風土記曰、稱伊奈利者、秦中家、忌寸等、遠祖伊呂俱、秦公積、稻梁有富裕、仍用餅爲的者、化成白鳥、飛翔居山峰、伊奈利生子、遂爲社、名至其苗裔、悔先非、而拔社之木、殖家祭之也、其木蘇者、得殖、其木枯者、不福、社名帳頭註、諸神記、二十二



文を引用たる互に異同あり、今校正て其是に従へども、猶文字を誤るも、脱るも有りとおぼし、

さて此白鳥神は、田穀を成幸給ふ宇迦之御魂神にて、食津物を麤忽に射戯れしを怒らせ給て、斯在奇異状を示して、神靈の顯坐るにこそあらめとて、御親神、宇迦之御魂神の御父母は、  
須佐之男命、大市姫なり、と共に三座の社を營建て齋祀れりしな  
るべし、

△花洛名勝圖會 東山之部 八

稻荷神社

本社五座 第一宇賀御魂神、第二素盞烏尊、宇賀御魂神、宇賀御魂神、御父なり、第三大市姫神、宇賀御魂神の御母なり、

△都名所圖會 卷之二

稻荷社

本社第一宇賀御魂神、第二素盞烏尊、第三大市姫、上巳

△東海道俚諺拾譚

稻荷大神、本社、第一宇賀御魂神、第二素盞烏尊、第三大市姫、上巳

△日本地誌提要 卷之三 畿内山城

稻荷神社、官幣大社、○紀伊郡、稻荷山、倉稻魂命、素盞烏尊、大市比賣神ヲ祭ル、延喜八年戊辰創建、

△古事類苑 神祇部 二十三

稻荷神社

稻荷神社ハ、山城國紀伊郡深草村、稻荷山ノ麓ニアリテ、倉稻魂神、素盞烏尊、大市姫命ヲ祀ル、○中世ニ此三座ヲ稻荷上中下社ト云フ、倉稻魂命ヲ

○神社啓蒙 二

稻荷

下社 大山祇女、非開耶、延喜式頭註、

中社 倉稻魂、同名異神、有三神、而司職各異也、勿混、

上社 土祖神、延喜式頭註、



(諸社一覽、日本風土記所載同)

△山州名跡志

稻荷宮

所祭三座

大山祇女、倉稻魂神、土祖神、已上、

上古ニハ三座ノ神三所ニ別レテ、上社、中社、下社トイヘリ、所祭上社ハ土祖神、中ハ倉稻魂、下ハ大山祇女也、

△國花萬葉記

一之下 諸神社

稻荷社 山城國帝城ヨリ東南二里、又稻成、又飯成共書ス、

所祭神三座

大山祇女、木花開耶姫ニハ非ズトナリ、又曰太田命、

倉稻魂、同名異神、三神有、

土祖神、又曰大宮姫ナリト、別本ニ由テ考ナリ、

今五座と稱するは、中の社を三座とす、

伊弉册尊、瓊瓊杵尊、倉稻魂、

△二十二社參詣記

延喜式神名帳曰、

稻荷神社三座

按、上社、土祖神、中社、稻倉魂命、下社、大山祇女也、

舊事記曰、素盞烏尊娶大山祇女神、大市姫、生大土神、亦名大土之御祖神、大

殿祭祝詞曰、豐宇氣姫、是稻靈也、俗云宇賀能美多麻命、神名祕書曰、神服機殿三狐神、皇字

沙汰文曰、御氣津機殿座、按、今稻荷神社、俗以狐稱神、使者、據御氣津、字作三

狐神乎、

△諸國鎮座記一ノ四

稻荷 紀伊郡帝城之東南二里計ニ在、

上社、土祖神



祭神 中社、倉稻魂 同名異神有三神、

下社、大山祇女 非、木花開耶姬、磐長姬歟、

△和漢三才圖會七十二本

稻荷社

社上 土祖神 共是百穀 豐饒守護

祭神三座 中社、倉稻魂

社下 大山祇女

或以爲五座則中社爲、伊弉册尊、倉稻魂、瓊瓊杵尊、

○延喜神名式比保古畿内山城二

稻荷神三社 並名神、大、月次、新嘗、

兼永作稻荷神社三座也、起謂倉稻魂一座、是號下社、天御孫尊一座、是號中社、諸根元記亦曰稻荷地神三代尊也者、是中社、御事也、伊弉册尊一座、是號上社、詳于秘訣之卷也、

△菟藝泥赴四ノ上

稻荷社

上社 伊弉册尊云々、或説土祖神といふ、然れども彼社家不用之、

下社 倉稻魂、是本社也、或は大市姫と申、雖然、彼社家には非也、

中社 瓊瓊杵尊、或説是倉稻魂と申、彼社家不用之、

右彼社家松本氏の説にまかせて記する所也、

△神社要録

稻荷神社三座 並名神、大、月次、新嘗、

祭神 倉稻魂、命一座、下社、天御孫尊一座、中社、伊弉册尊一座、上社、

以上、社家説、

○伊呂波字類抄 伊、諸社

稻荷

下宮田中 中宮、命婦、四大神、黑鳥、 上宮小辨

○雍州府志 三神、社



○ 稻荷社

上社、太田命、中社、倉稻魂、下社、大宮姬也。是稱上中下者、非神位之崇卑、就社之所、有而稱上下者也。今所傳謂五座、而中社為三座、所謂伊弉諾尊、瓊瓊杵尊、倉稻魂也。三座之中有瓊瓊杵尊、在此社稱十禪師宮、或號客人宮。

△西遊行囊抄十二上

稻荷山

神社便覽曰、延喜式神名帳云、山城國紀伊郡稻荷神社三座、

下社、大宮姬、中社三座、倉稻魂

上社、太田命

○神祇寶典卷一

稻荷神社三座 並名神、大、月次新嘗、

家說瓊瓊杵尊也、或說云、伊弉册尊之垂跡也。稻荷神社三座、高皇產日尊、神皇產日尊、宇氣持神者、吉田兼俱說也。宇氣持神者、神皇產日兒也。

○ 稻荷社事實考證記上

稻荷社御本宮並神號傳之事

御本宮三座

下社 若倉稻姬命

相殿

級長 戶邊命

級長 津彥命

中社 瓊瓊杵尊

上社 伊弉册尊

但口授十五箇條

右者、從當社秦始皇祖伊呂具公所傳、而秦氏累代奧祕之為、傳來今般田中社祝、秦親業依懇望、令相傳者也。他姓者、勿論、雖為同姓、不其器猥、勿傳焉。

○ 明和八年十一月

神主從三位秦親盛判



○獨倉文書

稻荷社奥祕口傳

一本社相殿五座

上社今爲第三座第 級長戸邊命也異說大

下社今爲第一座第 倉稻魂命也異說保

中社今爲第二座第 級長津彦命也異說種

客神伊弉册尊 十禪師天津彦火瓊瓊杵尊

右二神合祭於下社

(稻荷社事實考證記所載ト異同アリ、今從本書)

○秦山集雜著甲乙錄二

稻荷稻成之訓、五穀之神也、君臣上下不可不祭也、

○二十二社註式

或記曰、人皇五十二代、嵯峨天皇弘仁十二年夏、智證大師參熊野、以顯密法還向

之時、過紀伊國石田川下稻羽里之間、一人老翁多刈稻荷之、二人女亦戴稻、不知行方、失訖、其夜大師夢一人老翁者上宮、二人女下中社云々、今案稻荷社者、秦氏遠祖也云々、

△險の杉

二十二社註式に、或記曰、弘仁十二年夏、智證智證と書るは、弘法の誤なり、其説下に論ふべし、大師參熊野、以顯密法、又奉飾三所、威光此三所とは熊野三還向之時、過紀伊國石田河下稻羽里之間、一人老翁多刈稻荷、之二人女亦戴稻云々、中これより上件  
(二十一社記と蓋)と同一事にて、空海が事なるを、智證とし、書るは違へり、智證が傳を考ふるに、弘仁五年の生にて、其十二年は、わづかに八歳なれば、年頃も合はず、もとはたゞ大師と書るを、智證が門徒などのさかしましらに、かれが名を書加たるものなるべし、公事根元稻荷祭の條に、一説を擧て、弘法大給ひけるを、東寺の鎮守に勸請されたりと申説も待るなり、さかくて、上件に擧ていなりとは、稻荷と書たるとかやと記されたるも同説なり、かくて、上件に擧たる諸説どもの趣も、とより空海が偽妄説を、もてかまへたる所爲なる事



は論ふまでもあらねど、然ものしたりける事は實にて其門徒等の書きも傳へ語りもつたへ來れる趣なるを世々を経るほどに、とりくに乖離もいでき、また後の有さまに合へて、さおしら説をへたりときこゆることも交れるを、いまその諸説を併せて推考、とりすべて云はむには、弘仁十四年に、空海東寺を賜りたるに倣ひて、はやくより三ヶ峰に祭れる伊奈利神を、我寺の鎮守にせむと巧みて、稻を荷ひ杉葉持たる老夫老嫗の子を連れ來れるに逢て、云々と約りたるが則伊奈利神なりと稱ふ云々、

○日本書紀一

一書曰、伊弉諾尊、與伊弉册尊共生、大八洲國、然後略。中又飢時生兒、號倉稻魂命、  
△古事記傳九

宇迦之御魂神、宇迦は、上に云るとく食なり、書紀に、伊弉諾尊、飢時生兒、號倉稻魂命、倉稻魂此云、宇介能美拖磨、大殿祭祝詞に、屋船豐宇氣姬命、是稻靈也、俗詞宇賀能美多麻とある、此等は此記に、豐宇氣毘賣神とありしにあたりて、此なる神とは別なるを、御名の同きは、功德の等き故ぞ、彼は食の元始の靈、此は其食の事に功座し神なり、御魂とは恩賴、又萬葉五に、阿我農斯能美多麻多麻比豆などある意にて、其功德を稱へたる名なり、

△古史傳四

宇迦之御魂神、御紀に、倉稻魂命と書て、此云、宇介能美拖磨とあり、今は古事記に依れり、師云、宇氣を轉じて宇迦と云なり、如此れば、氣、宇氣、宇迦、みな同言にて、右の御名、いづれも此食の意なり、御魂とは恩賴、また萬葉五に、あがぬしの美多麻たまひて、などある意にて、其功德を稱たる名なり。と云れき、また内宮儀式帳、葭原神社の下に、宇加乃御玉御祖命ともあり、さて式に、山城國紀伊郡に、稻荷神社三座、並名神、大とあるは、此神を祭れる御社なり、其は二十二社註式に、稻荷社、倉稻魂命、一名、豐宇氣姬命、大和國廣瀨、伊勢、外宮同體、元明天皇、和銅四年、始顯、坐伊奈利山、三峰とあり、

○古事記上

猿田彦神



爾日子番能邇邇藝命將天降之時居天之八衢而上光高天原下光葦原中國之神於是故爾天照大御神高木神之神命以詔天宇受賣神汝者雖有手弱女人與伊牟迦布神自伊至布以音面勝神故專汝往將問者吾御子爲天降之道誰如此而居故問賜之時答曰僕者國神名媛田毗古神也所以出居者聞天神御子天降坐故仕奉御前而參問之侍爾天兒屋命布刀玉命天宇受賣命伊斯許理度賣命玉祖命并五伴緒矣支加加而天降也略中故爾詔天宇受賣命此立御前所仕奉媛田毗古大神者專所顯申之汝送奉亦其神御名者汝負仕奉是以媛女君等負其媛田毗古之男神名而女呼媛女君之事是也

△古事記傳十五

猿田毘古神名義書紀に口尻明耀云々とあると上光高天原云々とあるとを以思ふに尻シラ明ミ光ヒ彦ヒコなり、志理の理を略く例は備中郡名後月などをあり又云に同じ又且良を約れば多なりさて獸の媛は此神の形に似たる故の名なるべし

△古史傳二十

媛田毘古大神媛田は佐田と訓べし猿を古は佐とのみも云りし故に借て書りに見ゆ其は和名抄に下總國の郡名に媛嶋佐之萬とあり神名式に參河國賀茂郡狹投神社を同國本國帳に坐加茂郡正一位猿投大明神と見ゆ然れば古く媛を佐とも云ること炳し故借て書らむ然るを古くも猿字の借字なるを思はざりしと聞えて神代紀の下に此神の容貌を口尻明耀云々と猿の狀に見ゆべく書れしは甚しき非なること既に辨たるが如しさて此神やびて佐太大神なる由はたゞ比古てふ言の有無のみの違にて全く同じ御名なり其は出雲風土記に三所に佐太大神と記し神代紀に猿田彦大神とみづから名告まし古事記にも皇美麻命の御詔に媛田毘古大神と詔へり然れば此は尋常に大神と申すとは異りて刺國大神などの類にもとより大神と申べき由ありて負賜ひけむ是同神なるべき一證なり

○日本書紀二



因勅皇孫曰葦原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可王之地也宜爾皇孫就而治焉  
 行矣寶祚之隆當與天壤無窮者矣已而且降之間先驅者還白有一神居天八達  
 之衢其鼻長七咫背長七尺餘當言七尋且口尻明耀眼如八咫鏡而赧然似赤酸  
 醬也即遣從神往問時有八十萬神皆不得目勝相問故特勅天鈿女曰汝是目勝  
 於人者宜往問之天鈿女乃露其胸乳抑裳帶於臍下而笑矇向立是時衢神問曰  
 天鈿女汝爲之何故耶對曰天照大神之子所幸道路有如此居之者誰也敢問之  
 衢神對曰聞天照大神之子今當降行故奉迎相待吾名猿田彥大神時天鈿女復  
 問曰汝將先我行乎抑我先汝行乎對曰我先啓行天鈿女復問曰汝何處到耶皇  
 孫何處到耶對曰天神之子則當到筑紫日向高千穗穗觸之峰吾則應到伊勢之  
 狹長田五十鈴川上因曰發顯我者汝也故汝可以送我而致之矣天鈿女還詣報  
 狀皇孫於是脫離天磐座排分天八重雲稜威道別道別而天降之也果如先期皇  
 孫則到筑紫日向高千穗穗觸之峰猿田彥神者則到伊勢之狹長田五十鈴川上  
 即天鈿女隨猿田彥神所乞遂以侍送焉

○古語拾遺

于時天照大神中心獨謂比吾幽居天下悉闇群神何由如此歌樂聊開戸而窺之  
 爰令天手力雄神引啓其扉還座新殿則天兒屋命太玉命以日御綱今斯利久迷  
 像也廻懸其殿令大宮賣神侍於御前是太玉命久志備所生神如今世內侍豐磐間戸  
 命命櫛磐間戸命二神守衛殿門是並太玉命當此之時上天初晴衆俱相見面皆明白  
 伸手歌舞相與稱曰阿波禮言天阿那於茂志呂古語事之甚切皆稱阿那多能志  
 言伸手而舞今指樂事謂之多能志此意也阿那佐夜憩竹葉之飯憩木名也振其爾乃二神俱請曰勿  
 復還幸

△古史傳十二

さて内侍の仕奉る状は如此にて其は大宮能賣命の此時然して大御神の  
 御心をとり奉れるにならひ因ることなり其證は此神に申す祝詞に大宮  
 賣命登御名乎申事波皇御孫命乃同殿能裏爾塞坐氏參入罷出人能選比所  
 知志神等能伊須呂許比阿禮比坐乎言直志和志○古語云坐氏皇御孫命朝



乃御膳夕乃御膳供奉流比禮懸伴緒手繼懸伴緒手躓足躓古語云不令爲氏親王諸王諸臣百官人等乎已乖乖不令在邪意穢心無久官進進米宮勤勤米之氏咎過在波見直志聞直坐氏平久氣安久氣令仕奉坐爾依氏大宮賣命止御名乎稱辭竟奉登久白とあり是にて御名の義も御功のことも知られたり、かく君と臣との御間取持ち侍たまふ徳の卓れて大に坐故に神祇官の八柱の神の連にも祭られ給ひ、但し此八神の中に此神をも祭給へる事は、後たり思また朝廷に仕奉る官人等は更にも云はず古くは末々の人まで祭をなして其御幸ひを祈白せることになむ有ける其は兵範記に保元三年正月九日殿下宮咩祭如例右大臣殿御方初有此儀云々家令大舍人允紀宗頼爲祝師と見え、略中さて此神を祭れ社は神祇官の八神殿の外にも神名式に造酒司坐大宮賣神社四座、並大月次新嘗文徳天皇紀齋衡三年九月造酒司酒甕神、此は宇迦之御魂神の靈代なり其は酒殿神の神體を根倉ミカと云よし、本記に有にて知るべし、從五位下大邑刀自、小邑力自等、並預春秋祭と有り、これに依れば相殿に坐三柱を酒甕神、大邑刀自、

られ給ふことは、大御心を悦しめ、仕奉人たちの手躓足躓、また式に、丹後國丹波蹟などおらせず侍しめ給ふ御功に依ることなるべし、郡大宮賣神社二座、名神、貞觀元年正月、丹後國從五位下大宮賣神從五位上と國史に見ゆ、また式に、武藏國埼玉郡に、宮目神社などあり、また稻荷神社は、注式に下社大宮女命、異本中社大宮命婦、上社猿田彦命とあるは、よく事實に符ひて、後人のおしあてに思寄るまじき説なり、扱又笠間と云名にて祭れるは、式に、越前國坂井郡に、笠間神社、加賀國石川郡に、笠間神社、大和國宇陀郡に、笠間櫻寶神社などあり、さて此神は、かく太じき有功の神なるを、記紀共に傳洩したり、然るを拾遺に其事蹟を傳たるは、こよなき賜物なりけり、然るは下に擧るが如く、是太玉命、久志備所生之神と有て、大宮能賣命は、案に常に殊なる神なる故に、其生坐る時に、久志備なる祥有しなるべし、中略、然れば大宮能賣命と稱すは、萬幡豊秋津比賣命、又云務幡千の、大御神の御前に侍ひて、宮内の事取もち給へる功を稱たる亦、名にて、やがて天宇受賣命にぞ有ける、其はまづ上に記せる大宮賣命の事蹟をよく讀み熟思ふ







鎮座

○二十二社註式

稻荷社

人皇四十三代元明天皇和銅四年辛亥始顯坐伊奈利山三箇峰平處是秦氏祖中家等拔木殖蘇也秦氏人等爲禰宜祝供仕春秋祭依其靈驗有被奉臨時御幣(見于諸社根元記)

山城國風土記云稱伊奈利者秦中家忌寸等遠祖伊呂具秦公積稻梁有富祐(諸社根元記)仍(所引名帳頭註)用餅爲的者化成白鳥(鳥名帳頭註諸社根元記)飛翔居山峰子生(諸社根元記)所引作伊奈利生遂爲社名至其苗裔每先遇(每先遇神名帳頭引作梅)而拔社之木殖家禱祭之其木蘇者得殖(殖諸社根元記)木枯者不移(移諸社根元記)

△驗の杉

稻荷神考證



山城國風土記此風土記はもとより脱簡本なるを寫せる由、永祿元年十二月三  
 延長三年に、太政官符もて諸國司に仰せて召されたるが、古書にも此風土記の文  
 記にはあらで、其頃更に撰びたる書と見えて召されたるが、古書にも此風土記の文  
 を引載たり、そは此下に注すがごとく、さて風云、紀伊郡伊奈利社稱伊奈利者  
 秦中家忌寸遠祖伊呂具秦公積稻梁有富裕仍用餅爲的者化而成白鳥飛翾  
 居山峰伊爾奈利生遂爲社名至其苗裔悔先過而拔社之木殖家禱祭之今殖  
 其木蘇者得福殖其木枯者不福此文、異本三部を校見るに、互に寫し誤り、脱字、  
 また諸神記にも、件の文を引載たり、又年中行事秘抄、二十二社注式、諸社根元記  
 等にも、此文を採りて載たりと見えたるに、其書どもの異本をも校べ見るに、い  
 づれもとりぐに誤脱あり、今それらの本どもを校べ見て、おほかた其義の通  
 りてきこゆるかたを選びとるへて、此に舉記せるなり、かくて其諸本の異同  
 をひとつひとつ舉げむには、あまりにわづらはしければ、おほ  
 くはいはず、論ふべき事のあるは、其どころく注ふべし、  
 伊爾奈利生とは、この伊爾奈利生の五字、諸本伊奈利山の四字とし、山城名勝志  
 卿自筆本には、子生の二字とし、一本には、伊奈利の三字とす、かくまらゝに書  
 て、いづれにても其義きこえがたし、これもかれも誤脱をかさねたるものなり、  
 然るに諸神記に、此風土記の文を片假字に轉寫して、イナリ生と書き、一本には、  
 イネナリ生と書き、この一本なるを正しかるべき、上に舉たる書どもの書きま

を併せて考るに、本書には伊爾奈利生と書るを、とり、稻に穂の結びて生た  
 に誤り寫し傳へたるものなり、故いま訂して書き、  
 趣なり、天智紀、三年十二月の下に、是月淡海、國言、坂田郡人、小竹田史身之猪  
 槽中、忽然稻生、身取而收、日致、富、栗太郡人、警城、村主、殷之新婦、床  
 席、頭端、一夜之間、稻生、而穂、其且垂頭、而熟、明日之夜、更生、一穗、新婦出、庭、而筒、  
 鑰匙、自天落、前、婦取、而與、殷、得、始、富、と云へること見えたり、似たる事なり、  
 さて化而成白鳥とあるよりこゝまでは、神の御所爲なり、伊呂具が稻梁を  
 積たる富裕に心驕奢りて、餅をもて的とせるを警戒め給ふとして、其稻梁  
 にも彌倍りたる稻實を結生して示せ給へるなるべし、遂爲社名とは、伊呂  
 具、この神、咎を畏み、過を悔て、遂に其地に其神の社を造營て祭奉り、その靈  
 驗を稱へて、稻成と言ふ言をもて神社の名と爲る由なり、言便にイネのネ  
 を省きてイナリ  
 と云へ、此條の首に、伊奈利社稱伊奈利者と書出して、下文にかく伊爾奈利  
 生と、さらに假字もて書たるは、社號の義を明せる心もちひの書きまどぞ  
 きこえたるなり、

△古風土記逸文考證一



山城風土記云、南鳥部里、稱鳥部者、秦公伊侶具的餅化鳥飛去居其所、森云鳥部、河海鈔空蟬卷

△玉禱三

此社の始めは、山城風土記に、秦伊呂具と云ひし人、この地に稻梁を作りて富裕たりし故に、祭りて社名と爲たりしよし見え、諸神記に、元明天皇和銅四年二月九日（九日、恐七日誤）倉稻魂命始現于伊奈利山、地主神則荷田明神也、其地祀之、故號稻荷明神と有れば、伊奈利としも云は、稻梁の略語なるか、

△神祇志料六

稻荷神社三座、略、元明天皇和銅四年、秦中家忌寸等が遠祖秦公伊侶具始て社を建つ、年中行事秘抄、諸社根元記、四年、據二十二社註式、初伊侶具公、稻梁を積て富裕有り、仍餅を以て的とせらるに、化て白鳥に成て、飛翔りて三箇降平處に居り、稻奈利生き、其事甚靈異なるを以て、伊侶具私神として之を祭り、名て伊奈利社といふ、其苗裔秦忌寸中家に至て、伊侶具が過を悔て、社の木を抜て家に殖て此

神を祈祭りき、其靈驗に依て、朝廷より臨時の幣を奉り、其氏人等、又禰宜祝として此社に仕奉りき、故今も其木を殖て蘇ば福を得、其木を殖て枯ぬれば、福あらずといふ、山城風土記、參取年中行事秘抄、諸神記、

○年中行事秘抄

四月上卯日稻荷祭事

件神社立始祭始之由、慥無所見、但彼社禰宜祝等申狀云、此神、和銅年中始顯在伊奈利山三箇降平處、是秦氏祖中家等、拔木（拔木、群書類從本、作）殖蘇也、即彼秦氏人等爲禰宜祝、供給春秋祭等、依其靈驗、有被奉臨時御幣（又見于年中行事秘抄、諸社根元記、但根元作供給）

○公事根源下

稻荷祭 上卯日

此の神社建立の緣記、又祭の濫觴など、所見たしかならず、彼の社の禰宜祝の説には、和銅年中に始めて伊奈利山にあらはれ給ひけるとかや、或は弘法大



師の東寺の門前にて、稻負ひたる老翁にあひ給ひけるを、東寺の鎮守に勸請申されたと申す説も侍るなり、さて稻荷とは稻を荷ぶとかきたるかや、  
△験の杉

其伊奈利の社地、また其建立たる時の事は、年中行事秘抄、稻荷祭の下に、彼社、禰宜祝等申狀云、此神、和銅年中始顯、在伊奈利山三ヶ峰、平處と見ゆたり、平とは、山上の平なる處を云、諸國の地名に某平、某の平とてある平も、其平によれりときこゆ、さるは此山に峰三、並べる中の一峰の頂の平處に神の顯れ坐しけるを、やがて其處に社を建て祭始たる由にて、これ後にまた二峰に二座の神を祭りて、其を加へて稻荷神三座と稱し、但三箇峰とは、三峰、あるが故に、とりすべて山の名のごとく呼べる後世の名なるを、古にめくらしてかく云へるが、文の調はざるが故に、ふとはさこゆがたし、風土記にも考合せてよくよみあぢはひて、其意を得べし、其峰を上中下と呼別ち、其社をも別ちては上社、中社、下社と申せり、この上中下の社の事は、下の稻荷神三座の條に論ふべし、その中、峰の中社に當りて、三座の中の本神とぞきこゆたまへる、なほ件の禰宜祝等が申狀の全文を下に擧るを見合

せておきまふべし、〇下

○年中行事秘抄云、此書の奥書に云、永仁之頃被書始之、處、自然被開之畢、嘉曆、令終、寫功者也、四月上、卯日稻荷祭、事〇中件、社立始祭、始之由、無所見、但彼社、禰宜祝等申狀云、此神、和銅年中云云、此秘抄の撰者、此に擧たる山城風土記をば見られざりしなるべし、件の文、大外記中原、師光、朝臣の年中行事抄に載たるも、全、同じ、諸神記には、ただに元明天皇和銅年中云云と書出し、二十二社注式にも、人皇四十三代、元明天皇和銅四年辛亥、始顯坐伊奈利山三箇峰平處云云と書出して、下文はこの禰宜祝等の申狀と全、同文なり、また諸神記に、別に天曆勘文云、秦氏人為禰宜祝供仕春秋祭云云、秦氏人為の四字、脱たる本もありと記して、此申狀と同文なり、此記には、諸説を撰なく載たれば、件の勘文と云へるは、此申狀の事にて、其を他書に抄出して記せるまゝを採り載たるものなるべし、然らば此申狀は、天曆に禰宜等が進れる勘文にぞありける、さてこの申狀には、和銅年中とあるを、注式に四年辛亥と書るは、かの申狀の正本に依れるにか、また一説



を書加へられたるにか決めがたし、和漢合運にも四年に係

△本朝神社考上之二

稻荷

此神社、建立權輿未詳、社家者、説和銅年中、此神始現于伊奈利山、

△神祇正宗

稻荷大明神

人皇四十三代、元明天皇和銅年中ニ始出現、(諸國鎮座記、日本鹿の子、西遊行彙抄等所載亦同、京都巡覽記ニハ、和

銅四年出現シ給フトアリ、)

△稻荷神社考上

稻荷社、天曆勘文云、和銅年中始顯坐伊奈利山三箇峰、平處、是秦氏祖中家等、  
拔木殖蘇也、

此勘文にては、此神の顯れ坐るは和銅年中の事にて、風土記の傳と異なるにやと見ゆれど、よく思へば、然にはあらて、神の始て顯坐るは、上古秦

公伊侶具が時にて、和銅の時は、御社を定造りて奉仕れる始なるべきを、  
原文を略記すとして書僻めつるなるべし、○中其傳詳ならねども、其初秦氏人の所領地に顯坐る神にて、三座の御社を其地に營建て齋初祭れる故に、漸後には其氏人等禰宜祝となりて仕來れりと云由には聞えたり、

○神名帳頭註

山城國紀伊郡 稻荷 人皇四十三代、元明天皇和銅四年辛亥二月十一日戊

午、始顯座伊奈利山三ヶ峰、平處、(又見于華實年浪草、東海道俚諺拾譯、都名所圖會、和漢三才圖會、)

○神祇拾遺

稻荷社本縁

上中下ノ三座ハ、元明帝和銅四年辛亥二月戊午日、三峰ニ出顯也、

○大和豐秋津嶋卜定記

平京波 未深山 乃時利 既仁 帝都 乃勢自 良備支 波利 誠仁 日本 乃中心 國中 乃秀 天  
下無雙 乃勝地 利奈 南波 晴禮 北波 塞利 東波 流水 有天 福壽延長之謂 弘顯之 西波



長支山並比連禮四神相應弘爲寸然波四方四隅仁靈神並御座天代代乃固仁  
 奈豆氣利畧○中次仁辰巳乃方仁當天倉稻魂乃垂跡有利夫此神波百穀於播玉  
 布故爾名介奉留神代乃昔與此峰爾向伊玉母不知只三峰仁顯玉和之人皇四十  
 三代元明天皇和銅四年辛亥二月十一日仁垂跡寸誠仁諸人哀憐乃御心深久  
 蒼生乃作牟物波草乃片葉末百乃災於攘玉伊剩隨身乃寶於安久保事母皆此  
 神態奈禮誰賀此神於疎久世

○雍州府志

稻荷社 社家說元明天皇和銅四年斯神始現于伊奈利山○中昔者當社出現  
 和銅四年二月九日也

○延喜神名式比保古二

源春海考曰元明和銅四年辛亥正月朔丙午二月朔丙子十一日丙戌也七日  
 壬午蓋誤七爲十一乎起謂以當社鎮座爲二月壬午至今有初午祭祀也(見  
 于菟藝泥  
 赴秦山集)

△驗の杉

卜部兼俱郷の神名帳頭註には和銅四年辛亥二月十一日戊午始顯坐伊奈  
 利山三ヶ峰平處とあり今推檢るに其年の二月に戊午はあらず十一日は  
 丙戌なり神祇拾遺にも同じ月日干支に係て云る妄説あり察ふに其は初  
 午祭の起源にせむとて漫に日と干支を加へたる説なるべし但し諸社根  
 元記に此神の鎮座を和銅四年二月九日とあり九を七の寫誤とすれば七  
 日は壬午なり然らば件の帳の頭註に十一日戊午とある十一日は七日戊  
 午は壬午の寫誤にて實は二月七日壬午なりしによりて其月の初午日を  
 もて社司の殊さちに拜祭るによりて諸人も詣る例となりしにもやあら  
 ん

△稻荷社事實考證記

社司傳來記云當社者賀茂建角身命二十四世賀茂下社禰宜大山下久治夏  
 之季子秦公伊呂俱或作鱗和銅四年依勅命二月壬午祈年祭奉仕天下豐年依



其功改賀茂氏賜姓秦公厚褒賞焉

△稻荷社古今事實考證

抑伊奈利と稱するは山城國風土記年中行事秘抄などにも見えて人もし  
事なれど初て祭られし來由の正記は元明天皇の御宇鴨御祖皇大神宮  
禰宜大山下鯨が末子鱗鴨氏舊譜に勅して和銅四年二月七日此三ヶ峰に  
保食神を始め三柱神を稱へて祈年の祭を行ひ給ひしに秋を経て穀蠶共  
に豊饒なればその成功を褒給ひて長く祭の主と定め略

△便蒙秘記

當社御本宮三座之事

傳記云元明天皇和銅三年詔曰頃年陰陽殊謬氣序違膏澤不降田圃損而五  
穀不登蠶織不成天下之百姓衣食乏矣遣使名山大川祭神祠于時有神教而  
明年二月壬午使伊呂具祭三柱神於伊奈利山之三峰此年五穀大登蠶織成  
而天下之百姓得福矣

△官幣大社稻荷神社明細圖書

一和銅四年二月初午ノ日鎮座

○二十二社本縁

稻荷事

此社波平常乃說波爾弘法大師東寺仁住給留計時御弟子檜尾乃僧都實惠登云人彼  
乃寺乃南大門仁被計留徘徊老翁嫗乃異體奈留數多乃男子眷屬乎率天志稻乎  
荷天遠里與休息留留事乃體直也人登不見僧都成天奇異乃思於告大師申寸大  
師出給天招請志此人乎中門乃下仁物語志給計里何乃所惠向給登尋禰申左連  
波比叙乃阿闍利傳師事也我等乎守護世與招請勢奈留都答波計連彼波仁比叙神專  
鎮守天坐天志當寺爾佛法乎守給登宣波計禮承諾坐ス仍大師與此神同道有天勝  
地乎擇天今乃所爾鎮座云其東寺乃守護登成多麻也每年乃祭禮和東寺惠入  
給中門乃供御天登寺家是乎供寸又太摩我里登必供寸之大師乃時乃舊儀云初  
乃天寐乎稻志給利與稻荷乃神號也云二十一社



△神社啓蒙二

或問、稻荷神社、僧空海於東寺門前逢、負稻、老人海祭之、以爲東寺鎮守、以其擔、  
稻、故號、稻荷、云、奈何、曰、不知焉者、以爲然、知焉者、不信、故子舉其神名、使見之者、  
不惑也、昔者神社多爲浮屠、見攘竊、還就浮屠、覓其說、令之爲其傳、爲其記、胥率、  
之、陷于夷狄梵語之中、○中其號、稻荷者、所謂荷田神地、置倉稻魂、故也、

△菟藝泥赴四

公事根源には、弘法大師東寺の門前にて稻おひたる老翁にあひ玉ひける  
を、東寺の鎮守に勸請申されたり、さていなりと、は、稻を荷とかきたるにや  
とあり、是東寺の鎮守にいはい申されたるゆへは、さも有べければ、彼かた  
にては此説を用ゆべし、此神垂跡のはじめは、元明天皇の和銅年中なる事  
は、公事根源にも見えてあきらかなれば、稻荷の御名は、弘法大師より以前  
なるべし、されば稻をおひたる翁よりいなりの名は、じまれりとはいひが  
たかるべし、

△諸社一覽

號ヲ稻荷ト申事、空海東寺ノ傍シテ稻ヲ荷、老人ニアヘリ、是神ナルコト  
ヲ悟テ、即祭納、東寺之鎮守トス、此故ニ今祭ノ日、御旅所ヨリ本宮ニ還リ玉  
フトキ、神輿ヲ東寺ニ成シ奉レバ、東寺ノ堺内ヨリ役當アリテ神供ヲソナ  
ヘ、寺僧出テ眞言密乘ノ行ヲナシ、事オハレバ神輿本山ニ還リ玉フ也、是東  
寺ノ鎮守ナルコト也、老人ト化シ玉フ時、稻ヲ荷ヘルニヨツテ此號有ト云  
云、又卜部兼邦説云、稻荷之事一説、弘法大師入唐之時、御供被申、共有和銅年  
中ニ稻荷山ニ勸請也云云、右兩説ハ、兩部習合歟、唯一神道説云、當山之地主、  
神荷田明神ノ地ニ倉稻魂ヲ鎮座シ奉ル、故ニ倉稻ノ稻ノ字ト荷田ノ荷ノ  
字ヲ取テ號トス、(日本風土記  
所載亦同)

△稻荷神社考下

五社異傳

稻荷五社の縁故を後世に、僧家に云傳ふる説あり、其記籍どもを集めて通



覽に、悉皆此社の故事を後世より迎へて造れる偽妄なれば、論に足はぬと  
 も、寧樂朝より以來、惶くも皇國の神を佛説の中に陥て、悉く佛奴となした  
 る妄説に、世人久しく惑されて其邪妄普く敷演來ぬれば、いみじき博達と  
 云ども、皇國の古學に意無きは、此等の偽妄を深くも考正さずして、口實と  
 すめれば、今此末に輯録て其妄言の探べくもあらぬ由を著すに、なむ、○中  
 稻荷大明神流記云、弘仁七年孟夏之比、大和尚斗藪之時、於紀州田邊宿遇、異  
 相、老翁、其長八尺計、骨高筋太、內含大權氣、外示凡夫相、見和尚語曰、吾在神道  
 聖、在威德也、方今菩薩到此處、弟子幸也、和尚曰、予有祕教紹隆之願、神在佛法  
 擁護之誓、夫帝都坤角、九條一坊有一大伽藍號東寺、爲鎮護國家、可與密教靈  
 場也、必奉待而已、化人曰、必參會守和尚之法命、同十四年正月十九日和尙忝  
 賜東寺爲密教道場也、同四月十三日、彼紀州之化人來臨東寺、南門荷稻提杉  
 葉、率兩女具二子矣、歡喜備飯、獻菓爾後、暫寄宿二階、柴守點東寺、山定利生  
 勝地、此流記、稻荷鎮座由來記の首に記て、眞雅僧正の書る文と云り、○中此

餘東寺緣起、眞言傳、弘法大師行狀記、廿一社記、廿二社本緣公事根源、  
 埃囊抄等に、いふ所、各詳なるも、略るもあれど、總て此流記と同傳より出來  
 たるものなり、○中後世の識者は、是等の旨趣をば考ずして、稻荷神を東寺  
 の鎮守に祭初たる神なりとのみ思へるは、古學を忘果たる故なりけり、さ  
 て又東寺にて稻荷神を鎮守の如く崇來れるも、實に舊世よりの例なるは、  
 奈何なる故ぞと思ふに、此神の東寺を造らるゝ初に崇あらせ給へるを、空  
 海の太く恐畏て、此御社を崇奉りて東寺の守護神と御座べく祈奉れるよ  
 り、東寺の長者阿闍梨代々に惶み仕奉る例と成るに、そあるべけれ、さて神  
 宮寺をも此山に造立しより、終に神官は寺家の權勢に壓れて、此神社の事  
 勢一變れる後に、彼流記の如き説を新に構て、往古の事蹟を蔽ひて世に流  
 傳しめしなるべし、

△出定笑語附録一

扱マタ僧ドモハ、トカク尊クハヤル神ヲバ我ガ方ヘ引入テ、物奪ハントノ



工夫ニスルユトチャ、其中ニ稻荷神ノ本地ハ十一面觀世音デヤナド、云テ、愚人原ヲ欺クガ、ソノ云種ニ昔弘法ガ赤縣ヨリ歸リガケニ、何所ヨリ來ルトモナク同船シテ來ル白髮ノ老翁ガ有テ、夫ハ稻荷山ノ白狐デ、實ハ十一面觀音ノ化身デ有タガ、弘法ガ眞言宗ヲ弘ムル守、神トナラウト約束シテ、其後ニ今ノ稻荷山へ、稻ヲ荷タル老人ニ化テ現ハレタル故、夫ヲ祭ツタノデヤナド、シリモ結ラヌ大マンバケナ云ヒフラスガ、稻荷ノ大神ハ、ソシナタワイナイ物デハナイ、略 殊ニ此、御社ハ、元明天皇ノ和銅四年ノ御鎮座ダカラ、空海ガ赤縣カラ歸リタル、大同元年ヨリ九十五年前ノユトデ

△ル、嘘ヲ云ノハ、僧ノ持前トハ云ナガラ、大抵ニスルガヨイ、  
按に、元亨釋書一巻空海の傳に、釋空海、世姓、佐伯氏、讃州多度郡、人、父、田、公、母、阿、刀、氏、夢、梵、僧、入、懷、而、有、身、在、胎、十、二、月、寶、龜、五、年、生、焉、とありて、當社鎮座は、空海が生れしより六十年前なり、)

△驗の杉

かくて上件に擧たる諸説どもの趣もとより空海が偽妄説をもてかまへ

たる所爲なる事は論ふまでもあらねど、然ものしたりける事は實にて、其門徒等の書きも傳へ、語りもつたへ來れる趣なるを、世々を経るほどに、とりぐに乖離もいてき、又後の有さまに合へてさかしら説をへたりときこゆることも交れるを、いまその諸説を併せて推考へとりすべて云はむには、弘仁十四年に、空海東寺を賜はりたるによりて、比叡山の延曆寺に日吉神を鎮守とせるに倣ひて、はやくより三箇峰に祭れる伊奈利神を、我等の鎮守にせむと巧みて、稻を荷ひ杉、葉持たる老夫老嫗の子を連れ來れるに逢て云々と契約りたるがすなはち伊奈利神なりと稱ひ、上に擧たる古生たりといへるに據りて、老人の稻を荷ひたるがしかく、さて三箇峰の麓にといひ、驗の事を翻案ひて、杉、葉を持ちと云へるなり、 ちかき藤、尾の神社の地をもて、公家わたくしをこしらへて、峰上の三社を其地にうつしかの老夫老嫗、またその子を三座に配當て、さて社號を伊奈利と稱すに、かの老人の稻を荷ひたりと説ひたるにつけて、強ひて稻荷の字に叶へ書るを、公さまにも用ひらるゝ事となり來れるなるべし、



社地

○延喜式九

神名上

畿内神六百五十八座

山城國一百廿二座

紀伊郡八座

稻荷神三社

△諸社根元記

一稻荷

延喜神祇式曰山城國紀伊郡稻荷神三社

一方角事

巽伊勢稻荷祇園

△神社啓蒙



△稻荷

稻荷社者、在山城國紀伊郡、去王城東南許三里所。

△諸國鎮座記

稻荷 紀伊郡帝城之東南二里計ニ在、

昔、今ノ宮地ヨリ十餘町、山中ニ在、坂有テ諸人參詣ノ便惡ケレバ、今ノ地ニ引奉ルト也、舊宮ノ跡今猶在、(又見于諸社一覽、日本風土記、國花萬葉記、和漢三才圖會、)

△山城名所記

稻荷

此社は、東福寺より八町南也、(山城名勝志、所載亦同、)

△二十二社參詣記

稻荷の社へは、五條橋より廿五六町斗り、

△京羽二重大全四

稻荷山、或は飯成に作る、紀伊郡三橋七八町東南に在、上中下の三峰あり、依て三峯と云、稻荷神社の址あり、社今は山下にうつす也、

△花洛名勝圖會八東山

稻荷神社 洛の東南、伏見街道稻荷村にあり、俗に伏見の稻荷といふ、榎橋以南往還は、伏見支配なりといへども、當社は、京尹に隸す、

△都名所圖會一

稻荷社

三の峰稻荷大明神のやしろは、大和大路伏見街道の南にあり、

○官幣大社稻荷神社明細圖書

一京都府山城國紀伊郡深草村字福稻、稻荷山鎮座、

○藤森社緣起

弘仁七年大師法○弘 稻荷大明神爲勸請、藤森天王敷地之内所望之由、被達、叡聞、被伺、申當社、神慮之處、可奉借之由、依有神託、三山之麓勸請之、自爾以來、號彼所於稻荷、矣、

△雍州府志三神社

稻荷社、曾弘法大師於東寺、門前逢、荷、稻、老翁、其體不凡、大師以爲稻荷神之

山下移轉



化現者也則爲東寺鎮守於茲移山上神社於今處則號稻荷明神

△延喜神名式比保古二

稻荷神三社

起謂今社地藤尾郷也以舍人親王之神靈祭此地號藤尾大明神也弘法以稻荷三社遷此地以藤尾神遷藤森號藤森天皇弓兵政所今藤尾號稻荷村詳稻荷記錄也

△神祇志料六

稻荷神社三座昔伊奈利山三箇峰にあり後に今の藤尾に移る中嵯峨天皇弘仁七年二月丙午僧空海の請に依て神社を三峰の麓に移奉る即今地是也

△國花萬葉記一ノ下

稻荷社 帝城より東南二里

昔は今の宮所十町ほど山中のかみに有しを弘法大師神縁の事有て山より今の所にうつされけるを社家その舊地を別して御山と稱し毎年正月五日に各參禮すとなり

△京羽津根四

稻荷大明神紀伊郡田中宮三町南にあり社領百六十石

元明天皇の和銅四年はじめて此山に降臨し給ふ弘法大師東寺の門前にて稻を荷ひし老翁にあひ給ふに其容貌の凡ならざるを知り給ひていはく是いなり神の化現する所なりと始かの山上に勸請有しを同じ山の麓にうつし稻荷の明神と號又一説に弘仁十四年といひ云云

△險の杉

弘仁十四年に空海東寺を賜はりたるによりて比叡山の延暦寺に日吉神を鎮守とせるに倣ひて既くより三箇峰に祭れる伊奈利神を我寺の鎮守にせむと巧みて稻を荷ひ杉葉持たる老夫老嫗の子を連れ來れるに逢て云云と契約りたるが則伊奈利神なりといひさて三箇峰の麓に近き藤尾の神社の地をもて公家わたくしをこしらへて峰上の三社を其地にうつしかの老夫老嫗また其子を三座に配當てさて社號を伊奈利と稱すにか



の老人の稻を荷ひたりと説ひたるにことつけて、強ひて稻荷の字に叶へ書るを、公さまにも用ひらるゝ事となり來れるなるべし、○下略

△西遊行囊抄十二上

稻荷山通町ノ右ニアリ、

華表ハ路畔ニアリ、此地ハ元ハ藤森ノ地ヲ明神ニ借り給テ建社、今モ藤森ノ祭日ニ、社人來テ地ヲ返シ給ヘト、○下略例アリト云、

△平安通志三十一

稻荷神社 紀伊郡深草村大字福稻ニアリ、○中略往時伊奈利山三箇峰ニ齋祀ス、○中略嵯峨帝弘仁七年二月、僧空海ノ請ヲ以テ、神社ヲ三峰ノ麓藤尾ニ移ス、今ノ地即チ是ナリ、

○神名帳考證土代

稻荷神社三座

今大和大路ノ南ニアリ、所謂伏見街道ナリ、伏見稻荷ト云フ、永享十年、三峰ヨ

リ遷スト云リ、

△花洛名勝圖會八  
東山

稻荷神社

元明天皇和銅四年辛亥、三峰鎮座、永享十年、依將軍義教公、命移此處、

△都名所圖會卷二

稻荷社

三の峰稻荷大明神のやしろは、大和大路伏見の南にあり、○中略永享十年に、社を三の峰より今の地に移すなり、

△東海道俚諺拾譚

稻荷大明神深草稻荷山に鎮座す、(中略)永享十年に、社を三の峰より今の地に移す、

△稻荷谷響記

當社下山ノ年紀未詳也、或記云、永享十年正月五日、依將軍義教公之命、稻荷社ヲ自山上今ノ地ニ被遷云云、



△稻荷社事實考證記

社司傳來記云、後花園院御宇、永享十年正月五日、京都將軍義教公、依御願下社、中社、上社、又田中、四大神兩社、合テ同所ニ五社造營、遷座于今地、兼有御沙汰云云、

按ニ、御遷座之事、近來有説々ニヨリ、武邊江注進何トナク亂世ノ砌御遷座トアリ、

△稻荷社古今事實考證

古來傳來、當社下山、後花園天皇永享十年正月五日云、

境內

○稻荷神社古文書

一當所境內之事

東ハ上塚ノ東、武藏野谷ヲ限也、北ハ比沙門谷ヲ限ル、南ハフル瀧谷ヲ限ル、則是ヲ醍醐道ト號ス、西ヘスグニトナル繩手也、基ノ木ノ繩手ト云也、深草トノサカイ也、西ハ油小路マデ也、北ハ古ハ田中社ヲ限ル、然ニ九條殿ノ御代(弘安三年)ニ、光明フシ(フシハ降寺ノ畧書ナラソ)殿東福寺御建立ノ時、式地ヲカリ、寺ヲ御

タテアル、神領ノ目錄ニハ、坪付在之、今ハ法性寺ノ南口ノ橋ヲ境ト號ス、既ニ東福寺五社ノ宮ノ内ヘ、カヘリ峠トテ今ニ在之、田中明神ヘノ通道也、是ヲカヘリ峠ト申ス也、於向後守蟲喰田中町ヨリ下三町ヲ當所ヘ可付也、九條殿光明降寺殿ヘ借申置故也、爲末代如斯、

明應七年九月十六日

御殿預荷田宿禰修理亮延秀花押

總目代出羽守荷田宿禰延憲花押

○稻荷谷響記

口境內云社地

境內東西百八十二間餘、南北百九拾壹間餘、東ハ當山ノ堺ヲ限リ、西ハ大和大路ヲ限リ、南ハ深草領ヲ限リ、北ハ東福寺領ヲ限、テ也、但深草東福寺領、堺ハ谷川ヲ以テセリ、

○京都御役所向大概覺書五

山城國中御朱印神社之事



稻荷

社地東西百八拾貳間半、南北百九拾壹間半、稻荷奥山境内、東西七百五拾間餘、南北五百七拾間餘、南

△二都巡見記 亨

稻荷山稻荷社

社廻總間數之覺

東西百八拾貳間餘、南北百九拾壹間餘

山門總間數之覺

東西七百七間、南北五百五拾八間

右境内社中、京町奉行支配、門前町ハ、伏見奉行支配之由也、

○官幣大社稻荷神社明細圖書

一境内地總地坪

壹萬九千九百拾貳坪三厘

外

七百五坪七厘

増地

九萬五千九百七拾五坪四厘 復舊

合計拾壹萬六千五百九拾三坪四厘

一境内地古昔ノ坪數不詳ト雖、御改正迄ノ坪數、凡四拾貳萬九千貳百六拾八坪、維新後一般上地ニ相成、明治七年十月、更ニ現在ノ境内ニ定メラレ、其後

増地セラレタリ、

内譯

拾壹萬五千六百拾壹坪壹厘 境内

六拾八坪 拾貳祠

九百拾四坪三厘 山上七ヶ所神蹟

内

百七拾壹坪 上降

百拾壹坪三厘 中降



百七坪三厘

下峰

貳拾貳坪

荷田社

百六拾三坪七厘

劔石

百七拾五坪三厘

山御膳谷

百六拾四坪

御荒神峰

一的場

右者一月十二日此場ニ於テ奉射ノ式ヲ執行ス、

一拾貳祠

右者原由不詳、(按ニ、一ノ洞窟ニ、又舊來神輿御旅中、榎狐此洞窟中ニ於テ俗ニ十  
産スト云フノ俗傳ニ因テ、信)

者ノ輩之ヲ御産場ト唱フ、信)  
此洞窟中ニ於テ俗ニ十  
産スト云フノ俗傳ニ因テ、信)







社殿及建造物

○年中行事祕抄四月

上卯日稻荷祭事

件神社立始祭始之由、慥無所見、但彼社禰宜祝等申狀云、此神和銅年中始顯、在伊奈利山三ヶ峰、平處、是秦氏祖中家等、拔木殖蘇也、即彼秦氏人等、爲禰宜祝、供給春秋祭等、依其靈驗、有被奉臨時御幣、

延喜八年、故贈太政大臣藤原朝臣、(平時)修造始件三箇社者、

△本朝神社考

稻荷

此神社、建立權輿未詳、社家者流、說和銅年中、此神始現于伊奈利山、

○二十二社註式

稻荷社

人皇四十三代元明天皇和銅四年辛亥始顯、坐伊奈利山三箇峰、平處、是秦氏祖中、



家等、拔木殖蘇也、○中相次延喜八年、故贈太政大臣藤原朝臣平時修造、件三箇社者也。（又見于諸社根元記、諸神記、神社啓蒙、諸國鎮座記、本朝諸社一覽、神祇志料、東海道、但、勝拾譚、山州名跡志、日本風土記、山城名勝志、花浴名勝圖會、都名所圖會、京、羽津根、和漢三才圖會）

△稻荷神社考

稻荷社、天曆勘文云、和銅年中始顯坐伊奈利山三箇降平處、是秦氏祖中家等、拔木殖蘇也、○中年中行事秘抄上卷、四月稻荷祭條に、彼社、禰宜祝等、申狀云とて、此文を引記せり、諸神記、廿二社註式、諸社根元記等には、天曆勘文とて引たり、

此勘文にては、此神の顯れ坐るは和銅年中の事にて、風土記の傳と異なるにやと見ゆれど、よく思へば然にはあらで、神の始て顯坐るは上古秦公伊侶具が時にて、和銅の時は、御社を定造て奉仕れる始なるべきを、原文を略記すとして書僻めつるなるべし、

△國花萬葉記卷之一下 諸神 諸社之部

稻荷社

神殿を造らせ給ふは、延喜八年、贈太政大臣藤原時平公、三箇の社を修造し給ふと云云、明神降臨の年より百九十七年後なり、

△西遊行囊抄

稻荷神社

社ハ弘仁十四年始、建立也、又三箇社、修造、太政大臣藤原時平也、

○玉葉

文治三年（後鳥羽天皇）丁未三月十四日丙辰、此日、又被勘稻荷社遷宮日時、同事始上卿、帥中納言經房、參、伏座、令勘申之、左少辨親雅爲内覽持來、見了、返給、又有位記請印、上卿、源中納言云云内記爲内覽持來、同見了、返給、

○吾妻鏡

文治三年八月廿六日甲午、可令遠江守義定修造稻荷社之由、爲權黃門經房奉被仰下、所被募重任之功也、稻荷祇園、兩社破壞之間、皆付成功、可被終修治之功、  
△萩藩閣閱錄 七十三



△安田遠江守義定 文治三年七(誤八)月、京都稻荷祇園社、可修造蒙、宣旨、令製造之。

○玉葉

文治四年戊申三月十六日壬子、今日被勸、稻荷社遷宮日時、

○吾妻鏡

文治六年二月十日甲子、義定申狀云、

言上○中略

○一造稻荷社造畢覆勘事

右、上中下社、正殿爲宗之、諸神神殿、合期造畢、令遂御遷宮、候畢、自餘舍屋等事、又以非無其營、勤修行事、季遠懈緩之上、軒濫仍、雖相副、俊宗法師、候云、六條殿門築垣事、云、大内、修造、彼此相累、候之間、自然遲遲、更以不存、忽諸之儀、候已於不足之材、木分、悉、交量、直米、令沙汰、宛、都鄙之間、候畢、件、注文、同、以、進覽、候、此外、材木、檜皮、并、作料、已下、雜雜、用途、米等、任、損也、支度、先、

運上已畢、以前、條條言上如件、可有計御沙汰、候、恐惶謹言、

二月十日

義定上

進上 中納言殿

○百練抄十五後燧職

寬元三年乙巳、三月廿二日丁巳、稻荷社假殿遷宮日時定、并軒廊御卜也、稻荷社事、熊野社

同年十一月廿九日庚申、稻荷上社燒亡、

△歷代編年集成 二十五

寬元三年十一月廿九日、今夜稻荷上社炎上、件社、當時造營之間也、

○平戸記

寬元三年十一月卅日辛酉、傳聞、一昨夜、燒亡稻荷上社云云、神社回祿、異、他、無沙汰之旨如何、尤以不審云云、

○百練抄 十五



寛元四年二月廿三日癸未、稻荷上下社御遷宮日時定也、權中納言公光卿以下  
参入云々、

○百練抄後十六  
深草

寶治元年丁未正月廿六日庚辰、稻荷社正遷宮日時定也、二位中納言良教卿参  
之、

同年二月四日戊子、稻荷社遷宮也、丑刻云云、

○増鏡七  
北野の雪

文永も三年に成ぬ、略○中 又の年略○中 大風ふきて、略○中 いなりの中の宮までも  
吹そこなひて、すべてきしかたゆくすえも、ためしありがたきかぜなり、

○稻荷社事實考證記

御殿又云本殿、又本  
社、又云下御殿、

社司傳來記云、後花園院御宇、永享十年正月五日、京都將軍義教公、依御願、下社  
三社ノ相殿、又中社上社、又田中四大神兩社、合テ同所ニ五社造營、遷座于今地、

兼有御沙汰云云、

按ニ、御遷座之事、近來有説々ニヨリ、武邊江注進、何トナク亂世ノ砌御遷座  
トアリ、

永享十年奉勸遷、于今地、山上、通、宮殿舍屋造立、諸神事奉仕、山上ニモ神殿有、  
之神靈神寶等奉安置、

○野史本紀四

應仁元年五月二十一日乙酉、稻荷社火、分類、先是、山名宗全、細川勝元、送樹黨大  
翁、諸道兵、於京師、勝元居、東宗全陣、西相持、足利義視馳驅、東西開諭之、不從、至是、  
交兵、爭戰數合、勝元每得利、宗全連募黨於諸州、數縱火、

△九歎私記

應仁元年、後土御門院 四海喪亂、武將義政  
公治也、 當社兵燹云云、

○稻荷社事實考證記

應仁二年三月廿一日、多賀豐後守高忠、從者骨皮左衛門尉道源等、燒拂當社山



上山下、宮殿社屋、而爲陣營、下社神主公歲、中社神主公常、上社神主親爲、正祝親潔、權禰宜經次、權祝公之等、中社祝、上社祝、奉守護、神璽、避兵火、而逃近里、此時社記神寶、罹兵火、燒亡者多矣、

△東寺長者補任

應仁二年三月廿一日、寺中諸門閉之、朝之間者南大門、并慶賀門開之、處稻荷ニ目付ノ道賢取籠間、甲斐朝倉、大勢行向、道賢打之、彼社、堂社、人家等悉燒之、  
△東寺私用集

一應仁二年三月廿一日、巳ノ刻ニ、稻荷社、文殊堂、一重塔、本地堂、御影堂、號稱弘法、五社、御輿屋、五間、命婦御前等悉燒之、甲斐朝倉、衆燒之、此御輿五社ノ分散在ノ衆、按ニ、蓋今ノ、五奉取出之、

△山禮記

應仁二年三月廿一日、稻荷社燒上、近所近郷、寺社、一宇、無之子細ハ細川殿、今度道見ト申、目付ニ、下京ヲヤカセラルベキトテ、稻荷社ニ陣ヲ取了、

△應仁記

醍醐山科合戦之事

又醍醐山科ハ、三寶院御持有ケレバ、御合力トシテ赤松衆、武田衆相拘タリ、爰ニ目付ニ骨皮左衛門道源トテ、多賀豊後守所司代之時、走舞タルガ、手ノ者共京中城脇ニ多カリケリ、申子細在ケレバ、勝元、吳服ノ織物、金作ノ太刀ナド給ケレバ、山科ヨリ稻荷ヘ打越テ、社務（社司）羽倉出羽守申合、イナリ山ノ上ノ社ニ陣ヲ取、伏見、小幡、藤ノ森、三栗、深草、淀、竹田、鳥羽、法性寺小路マテ、手ノ下ニ見テ有ケレバ、大略郷人共降参シテ、下京ハイカマアルベキトオモヒケル處ニ、山名、畠山、諸勢差遣シ、稻荷山ヲ責ケレバ、處々ノ惡黨物取共ナリケレバ、方々ヘ逃散ス、

○稻荷社事實考證記

應仁二年十二月、造營假殿、不日而成畢、十二月十五日、悉奉安置、神璽者也、

○九歎私記



○文明元年(應仁三年四月)再罹池魚之殃當社延及社家掃地蕩盡斯時舊記于時本願圖阿假手四方營構當社經營之其遷宮式今猶在目代家矣

一應仁文明之比當社兩度炎燒社司等迄散在仕此節舊記等燒失仕候其砌今之御殿假ニ修造相殘候社司遷宮仕候其書付兩家(御殿預)之者此度指出候得共亂世之時節ニ有之候ハ社法ニ無之様ニ奉存候其子細ハ兩家之者内々陣ヘハ曾テ入不申候處其記ニハ御殿預遷宮之手傳仕候様ニ相見ヘ申候

○稻荷谷響記

稻荷社五座相殿稱本殿是也

西向

右當社ノ間數表五間五尺二寸奥行四間六尺五寸并御拜所表三間三尺四寸奥行二間但シ丹塗ニシテ彫物金物飾彩色セリ社廻石垣ナメグラセリ五座相殿ノ神ハ稻荷三座上社中社下社ニ田中社四太神二座を合テ五座と成奉レリ應仁燒亡以前マデハ各別殿ニマシマセリ

當社ハ應仁二年三月二十一日ノ兵火ニ山上山下之神殿社屋悉ク燒亡シテ社司等隨緣離山或ハ他國ニアリ文明十一年以來世上聊靜謐なるに及テ社司等頗る本腹之體也依之漸ク權殿カウシヤ建立成畢テ先ツ五座相殿ニ勸請シ奉ル今ニ至ルマデ如斯則々今ノ五座相殿ハ文明ノ權殿也

○稻荷社事實考證記

明應八年十一月上下御殿造營成畢同月廿三日遷宮也按此時造營依爲用脚不足始而爲下中上社相殿無念之儀也

△便蒙祕記

明應八年十一月廿三日遷宮一社ノ沙汰トシテ神殿并舍屋修造此時用脚依不足下中上社三社相殿トス依之始稱上御殿

○稻荷社事實考證記

天正十六年秀吉公依御願上御殿造替廻廊等再興  
同十七年八月造營成畢正遷宮



△官幣大社稻荷神社明細圖書

一本社建築年度及由緒

天正十七年八月、秀吉公ノ御沙汰ヲ以テ造營セラル、今ノ本殿ハ此時ノ儘ナリ、

○九歎私記

元祿七年甲戌三月十三日辛亥、天晴、已下刻、雜職四五右衛門方より之書狀に云、御用之義候間、社中二三人早々淡路守殿(寺止奉行小)御屋敷江御出可有之、親榮信辰、公建、公治、爲量等參上、淡路守被申渡之趣、當社御修理之義、從關東申來候、中井主水千兩餘とつゝり候へども、久敷修造無之社、其上當社自分別而信仰故、其外申遣候處、此義も相調、金千五百廿五兩之修理料出候、諸事中井主水承支配候間、萬端此者と可示合候、奉行、此方之與力、伊豆殿(松前伊豆守)與力可遣候、假殿遷宮、正遷宮、首尾能相勤、修理料少分候間、諸事了簡可成義ハ可致了簡候、

風記

陰陽寮

擇申 稻荷社假殿遷宮之日時

八月三日 戊戌 時戌

同月九日 甲辰 時亥

七月廿六日

助兼宮内大輔賀茂友親

八月九日 甲辰、雨、假遷宮亥刻、社司行列等如式、

假殿遷宮次第

一兼日修復若宮、此爲假殿、

一前齋三日、

一勘文之日時、某早旦、或前日、

一以淨水洗假殿、内陣以白布拭之、修理職、神人等役之、

次清祓作法別式



次本殿假殿樓門、鳥居各左右、立榊付、四手、神人等  
 次本殿假殿之間處處庭燎、神人衛士  
 次遷官用具等令檢知之、入辛櫃置、本殿之側、白丁二人昇之  
 次到、刻限、社司等參昇于本殿着座作法如常、  
 次神人一老、奉仕、庭上之儀、  
 次本殿假殿路次之間、敷簀薦、其上敷白布為緣道、  
 次自本殿、南柱迄假殿北柱引廻、外幕、五色幕串各付榊枝、右神人修理職役之、  
 次正官五人、開、內內陣、御戸、  
 次正官五人、垂覆面、指手袋、入內內陣、此時笏拍手、令消庭燎、  
 次正官五人、奉、御正體、鎮座于假殿、  
 遷官次第

前驅

散米一器	神人一老
神木二本 <small>右左</small>	神人三老
太麻二本 <small>右左</small>	神人五老
下社御正體	社務奉
御撫物	正禰宜奉
御太刀	正祝奉
中社御正體	中神主奉
御撫物	權禰宜奉
御太刀	權祝奉
御面	下禰宜奉
嶋命婦	中禰宜奉
上社御正體	上神主奉
御撫物	上禰宜奉



御太刀 中祝奉  
 田中社御正體 御殿預奉  
 御撫物 上祝奉  
 御太刀 田中祝奉  
 四大神御正體 目代奉  
 御撫物 權預奉  
 御太刀 權目代奉  
 五座之神寶等、如本殿安置之神太麻等、殿下左右立之、  
 次正官五人、下内内陣、御簾、此時笏拍手、令明庭燎處處火、  
 次撤幕、  
 次社司等退下、  
 次奉幣、  
 次遷宮祝詞、

次神供、此間於庭上神樂

次神供祝詞、

次閉、内外之御戸、

次社司各退下、

一愛染寺勤行、

元祿七甲戌年八月九日

社務 松本信濃

中神主 大西備前

上神主 松本左近

御殿預 羽倉主膳

目代 羽倉立蕃

普請奉行座辨財天堂前、西北向 社司着

傳奏座本殿權殿間北向 公儀座大黒堂東、權殿前、北南向

座大黒堂前、西東向 神人列社司、次

右何<sub>レ</sub>板<sub>ハ</sub>之<sub>ハ</sub>也



○京都御役所向太概覺書五

山城國寺社方間數御修覆之事

一稻荷社堂舍

御本社 表五間五尺貳寸、奧 御拜共 禮拜所 表三間三尺、若宮社 表四  
 行三間 御拜共 大黑天社 數略 御拜共 辨財天社 數略 御拜共 神寶藏  
 行貳間半 廂有 御供所 梁行貳間 床指出 御輿宿 梁行貳間四尺四寸、  
 拜殿 梁行四間 手水屋形 梁行六尺八寸、樓門 梁行四間貳尺五寸、  
 右之外、小社七箇所、鳥居貳箇所、所々木柵等御修覆有之、

右元祿七戌年、爲御修覆料、金子千五百貳拾五兩、大坂御藏金被下之、遷宮料米  
 貳百石、社家社僧 被下、二條御藏米相渡ル、修復中、小出淡路守組與力、松前伊  
 豆守組與力、奉行相勤、修復有之、

小出淡路守與力奉行 入江安右衛門

松前伊豆守與力奉行 西尾甚右衛門

○後中内記

元祿七年十月廿九日、稻荷社正遷宮日時定之事、右社尤雖可爲陣宣下、武家用  
 脚不足、且官幣之事、同社中雖望申、是以同前也、今度造替之事、自武家沙汰之、作  
 料別也、各別爲遷宮料、貳百石用脚出所也、然此詮議、稻荷傳奏□□此沙汰事  
 也、町奉行急日時之事、申彼傳奏也、雖然、漸々三十石許、殘置也、仍用脚不足也、官  
 幣是又五社分五十石也、傍以難叶、仍武家傳奏、議奏相談、關白申合、候其上にて、  
 可及言上有、僉議、關白然者、日時定之事、消息宣下可然、之由被申上所也、以言上  
 之通、被仰出也、貳百石之内、而陣宣下雖可、事行事、彼傳奏云、若輩、又社家、彼奉  
 行、諸事示合也、望申事、并日時定事等、皆成、後畢、畢竟彼傳奏遲、僉議故也、樂人之  
 事、被申、是又如放生會、行幸之體也、大社ハ無之、樂心供神、供時各別之事也、十  
 人可參之、由關白被計申由也、今日、日時定消息宣下、左中辨俊清奉也、參向之辨  
 同人也、是又依無、下行如此、地下所役人不參、彼社、是以用脚之故也、假殿於遷宮  
 者、被用風記、申文、御殿重頂戴了、十一月二日、稻荷社正遷宮也、子細見、廿九日、



午斜參内、入夜退出了。

○兼輝公記

元祿七年十一月四日戊辰稻荷社正遷宮云云、作法追而辨俊清參向云云、

○季連宿禰記

東山天皇元祿七年甲戌十一月四日戊辰、今夜戌刻、稻荷社正遷宮也、藏人右中辨俊清、小川坊城被參向、稻荷社云云、傳奏伯三位白川雅光卿同被向社頭云云、

遷宮日時定以下之事、去月廿一日以後記之、去八月九日、假殿遷宮日時定、宣下之事不及沙汰、正遷宮日時、去一日書調、宣旨自右中辨被付伯卿、川自伯卿被渡社中者也、史以下參向無之、

△公卿補任

元祿七年十一月四日、稻荷社正遷宮、右中辨俊清參向、

○九歎私記

元祿七年十一月四日、正遷宮、社頭次第如左、

一前齋三日

當日早旦、御殿預行、清祓、

次本殿、權殿拜殿、樓門、鳥居、各左右柱立、神附、四手神人之役、

次及、薄暮、本殿權殿之前、設庭燎衛士之役、

次遷宮用具、入唐櫃二荷、昇居於便所、

次前時刻、社司各參集於拜殿、

刻限、勅使參向氏人之催、

次社司各下拜殿、列立樓門、南向、勅使一揖、

次勅使於拜殿、東御手水氏人之役、

次勅使着給、幄、

次社司各參昇於權殿、

次樂人着幄、

次本殿、權殿、東西曳、巨五色幕、其内鋪筵、道神人奉仕之、幕、串各附、神枝、引、注、連、繩、



次正官五人開內陣之御戸此時奏亂聲氏人催之  
 次正禰宜下殿就勅使幄前豫敷膝申神體遷御之由申了還昇於權殿  
 次正官五人垂覆面指手袋入內陣奉御正體安鎮於本殿此間消庭燎止亂  
 聲一老神人以笏拍手示之

遷御次第

前驅

散米一器

神人一老

神木二本

同同 二老

太麻二本

同同 四老

下社御正體

社務奉

御撫物

正禰宜奉

御太刀

正祝奉

中社御正體

中神主奉

御撫物

權禰宜奉

御太刀

權祝奉

御面

下禰宜奉

嶋命婦

中禰宜奉

上社御正體

上神主奉

御撫物

上禰宜奉

御太刀

中祝奉

田中社御正體

御殿預奉

御撫物

上祝奉

御太刀

田中祝奉

四大神御正體

目代奉

御撫物

權預奉

御太刀

權目代奉



次神寶等安置之、神太麻等、外陣、左右立之、  
次正官五人脱、覆面手袋、下内陣、翠簾、此時令明庭燎、一老神人以笏拍手示之、

次勅使退去、

次撤幕、神人役之

次社司各下殿、就神供所、

次社務奉幣、幣使權目代、一老神人傳之、

次正祝参候、於大床、讀遷宮祝詞、讀畢退下、

次正官五人奉幣、

次社司各昇殿着座、作法如常、

次獻神供、此間奏樂、

次正祝進、於大床之中央、讀神供祝詞、讀畢復列座、

次奏神樂、氏人催之

次撤神供、此間亦奏樂、氏人催之

次正官五人閉内陣御戸、禰宜祝等垂御簾、下御格子、

次各退出、(愛染寺勤行式略)

元祿七年戊十一月

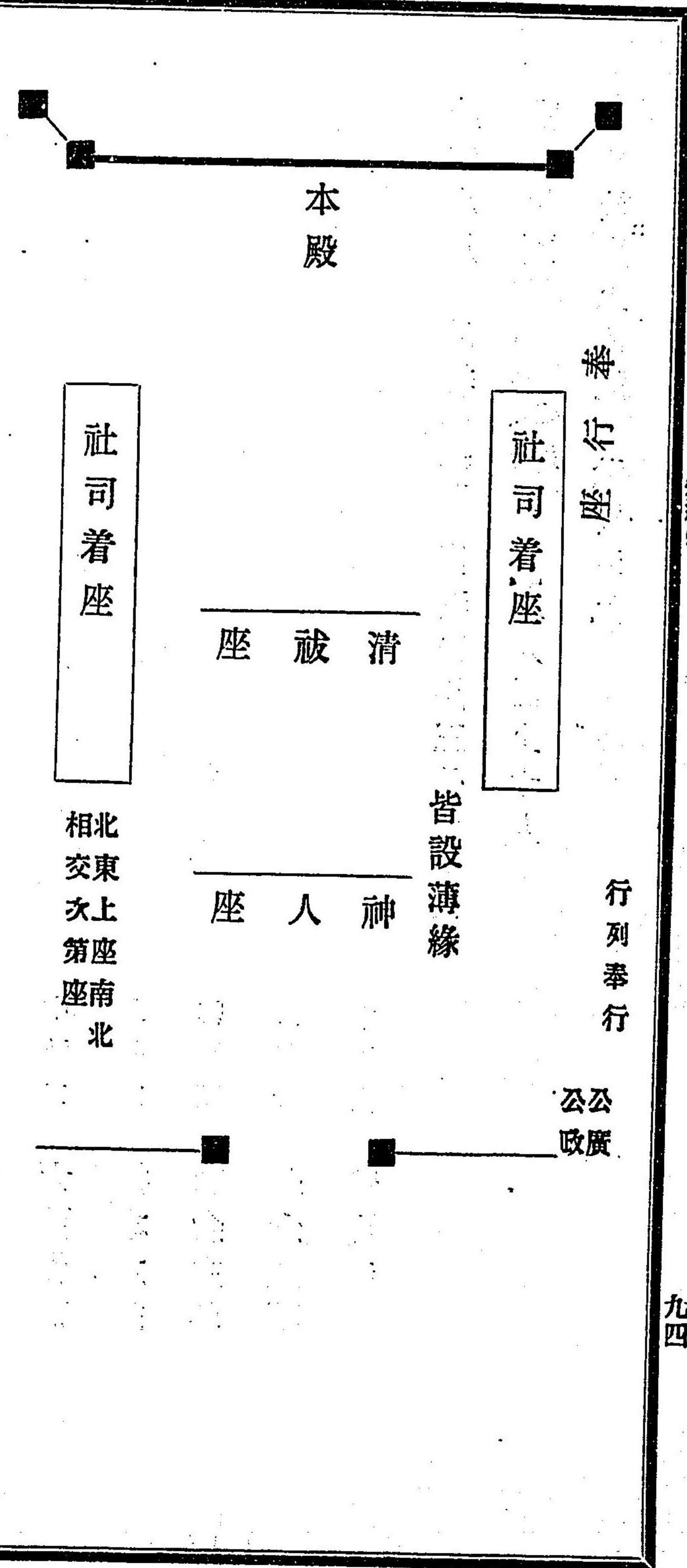
- |     |      |
|-----|------|
| 社務  | 松本信濃 |
| 中神主 | 大西備前 |
| 上神主 | 松本左近 |
| 御殿預 | 羽倉主膳 |
| 目代  | 羽倉立蕃 |
| 本願所 | 愛染寺  |

勅使小川坊城辨俊清 傳奏白川三位雅光王

當日樂頭園若狹廣秀 久保甲斐近純 樂人已上十人

於庭上清祓 社司着座





正遷宮式戌刻、  
 群集雜職奉行警固、  
 勅使庭上參向時、從大鳥居入給、  
 勅使參向社司下、拜殿到庭上、已後本願於拜殿勤行、今未刻許、

子下刻諸式相濟、

○堯恕法親王記

元祿七年十二月十八日、稻荷社參詣立々院大僧正同道也、彼社今年爲武家沙汰改造也、先月末つかた有遷宮歟、尤華麗之爲體也、

○中祝秦公杓日記

文政二年十月十六日、今般就御修覆如先例、若宮壘幣遷座于本殿之事、

○今晚戌刻若宮壘幣遷納于本殿也、祝詞如左、

高天原爾神留坐寸皇親神魯伎神魯美尊乎以我皇御孫乃尊乃安國止平久  
 所知食瑞穗國乃中乃稻荷山乃下津磐根爾宮柱太敷建高天原爾搏風高知  
 天奉仕留禮三柱大神攝社大神又社社爾齋祀留禮神等天乃御蔭日乃御蔭止隱  
 之奉仕里所乃殿社幾歲乎經天破損荒朽乎太流奉總修理止是以天今日乎  
 始止之權殿乃內爾寬文十五年九月社務高經奉納留禮若宮乃壘幣元祿七年  
 御修理乃任例天此十月十六日戌時乎良日乃吉刻登大宮乃神座乃邊爾納



居置武事乃狀乎告申<sub>止</sub>今奉留御幣神慮<sub>毛</sub>足志<sub>爾</sub>所聞食<sub>天</sub>此修理<sub>爾</sub>預里  
 奉仕留棟梁乎始末乃諸丁<sub>仁</sub>至<sub>天</sub>萬手蹟足蹟無久不量<sub>毛</sub>過犯事有<sub>武</sub>乎神直  
 日大直日<sub>爾</sub>見直之聞直之守助賜<sub>天</sub>風雨水火<sub>能</sub>無災<sub>久</sub>總<sub>天</sub>事穩<sub>爾</sub>守幸賜  
 倍殊<sub>爾</sub>國家無動<sub>久</sub>天下平<sub>久</sub>安<sub>久</sub>敷地<sub>乃</sub>人等無障無災夜<sub>乃</sub>守日<sub>乃</sub>守里護  
 福給<sub>倍</sub>恐<sub>美</sub>恐<sub>美</sub>申<sub>寸</sub>

文政二年十月十六日

○白川伯家御日記

文政四巳年二月十一日廣橋家<sub>乃</sub>御家來御招<sub>二</sub>付<sub>右</sub>京罷出候處

稻荷假遷宮日時定來ル十四日午刻<sub>乃</sub>未刻迄之内宣旨使被遣之義御達  
 四ツ折 稻荷社假遷宮日時定宣旨持參

宣旨使 右大史行厚  
 副使 宗岡行修  
 使部

稻荷社假殿遷宮日時定宣旨使參勤

行厚 如木雜色 傘持<sub>身</sub> 御床持

稻荷社假殿遷宮日時定宣旨副使參仕

宗岡行修 如木 傘持<sub>身</sub> 沓持<sub>身</sub>

道筋行列書壹通<sub>中</sub>

十四日晴天今日日時定陣

宣旨使、右大史行厚 副使、召使左兵衛少尉宗岡行修 參向、使部相從

○中社祝秦公杓日記

文政四年辛巳二月十四日<sub>未</sub>假遷宮日時定宣旨使參向次第如左

右大史行厚<sub>山口治</sub>乘輿副使宗岡行修<sub>青木左兵衛</sub>同使部等

次沙汰人案内社務以下各衣冠單神人一二三四臈加勢一人等各淨衣單衛士

兩人大紋帶劔各着<sub>于</sub>土屋<sub>有</sub>祓之儀

次社司昇殿揚御格子掛壁代<sub>無御戸</sub>卷簾一統拜儀



次社司下殿前庭左右分頭斜着座以上東神人立便宜所

次史副使使部等参向衛士迎出鳥井也

次史以下参向立于中門依雨儀樓門下衛士中門外因雨儀樓門外左右着座

次社務昇殿着座

次禰宜出向中門內樓門內史授文書於禰宜禰宜取之昇殿進于社務復座社務披

見供案上復座

次田中社祝目代昇殿取神祿下殿史之祿田中祝授之副史之祿目代授之使部

之祿職事授之此祿豫設御殿庇簾下

次史以下退出衛士送出如故

次社司一統昇殿文書拜見之後一統拜儀奉送

次垂御簾入御格子下殿退出

一宣旨左之通

左辨官下稻荷社

應任日時令勤行當社假殿遷宮日時事

今月二十六日丁未 時亥

右權大納言藤原朝臣家厚 ○花山院

宣奉勅任日時令勤行者社宜承知依宣行之

文政四年二月五日

大史小槻宿禰判奉

右少辨藤原朝臣判 ○柳原隆光花押也

○行通朝臣記

文政四年二月廿六日晴今日稻荷社下遷宮云々白川二位以自分参向云々自社之云云

○白川伯家御日記

文政四年二月廿六日午半刻二位殿御出門略中

一御初穗金百疋是者先例羽倉伯者守方被遣候事

一遷宮無滯被爲濟候旨子刻注進罷出ル直ニ御添使ニ而廣橋殿へ参上頭左



中辨殿直ニ御參内之事

○中社祝秦公杓日記

文政四辛巳年二月二十六日丁未當日假遷宮次第左之通

一亥刻社司已下着土屋修禊

次社頭辨備之由告于執奏卿

次執奏卿着舞殿給

次社司昇殿着簀子座

次奉迎開御戸警蹕一統平伏捲簾

次日代上祝權目代下殿參于假殿

次捲簾設掌燈

次日代正祝權目代復參于本殿

次一統拜儀詞告可奉遷假殿之由

次三神主御殿預目代參于假殿

次神人二臈敷庭道布單

次禰宜令神人消掌燈假殿已下應之

次有渡御御先神人執賢木發聲衛士執白杖前行先田中社次上社次下社次

次供掌燈庭上應之

次下神主以下一統假殿軒下一列立

次悉奉爲遷宮之由告于執奏卿卿令退給

次社務奉幣權目代役送一統拜儀祝詞訖禰宜供御幣于中央

次一統昇殿

次供神饌

次拜儀祝辭

次庭上奏神樂畢撤神饌

次奉送閉御戸警蹕一統平伏垂簾

次下殿



次參向于上御殿、

次退出巳刻前、

○忠言卿記

文政四年二月廿七日戊申、稻荷社假殿遷宮、昨夜無爲候旨、白川二位伯代被届承置候、

○實久卿記

文政五年十一月十日庚辰、今日稻荷社正遷宮也、行事、辨光成朝臣參向云々、

○白川家記錄

文政五年十一月十日、稻荷正遷宮等之留、

一今日、正遷宮ニ付、伯樣御參向、巳刻御出門、清和院御門ヨリ京極通南へ、五條

橋通東へ、伏見街道稻荷へ、無御小休所、○中

午半刻御着、○中

一勅使頭辨殿、未半刻御着到、

一史以下、其以前着到、

一頭辨殿、御休所江爲御挨拶、御出會

一爲御初穂金百疋御備、任元祿之例、羽倉伯耆守江、被遣候事

一社司一統并史生、行事官、内匠助、官掌、小野兵部丞、樂人、窪甲斐守、安信、立蕃、權助等、爲窺參上、

一青侍貳人ハ、支度後歸リ候事、

一刻限、亥刻ニ候得共、戌刻ヨリ可催之旨、一社へ申達候事、○中

一子刻前、遷御無滞被爲濟、○中

正遷宮社頭次第

當日、社司、氏人等、齋浴着、齋服、束帶總着、詣、神前、

次社務、令、神人、問、殿庭敷設具否、神人申具由、

次社司以下、移着、土屋、修、祓、

次社司參假殿、開、御戸、



先是樂人參向發亂聲、  
次供朝神饌、

此間樂人奏樂、

次社司參本殿開御戶、

整弓箭、

次一社傳奏參向於樓門下、

手水氏人着御代座、

次勅使參向于鳥居外氏人爲解除解除訖勅使下車、

次社司迎勅使於鳥居內勅使氣色史生官掌等相從參入諸司豫參向、

次勅使於樓門下手水氏人史史生官掌入中門着廊代座豫設其座諸司役之

次撤神饌、

此間樂人奏樂

次社司參假殿、

次禰宜檢知遷御事具否之後參進告可奉遷御之由於勅使勅使氣色、

次社務以下拜禮奏奉遷御之由、

次令神人敷筵道布單、

次消諸火、

次渡御于本殿、

社司發警聲神人繼聲執柵拂御先執白杖警衛、

此間勅使以下降地上平伏、

次鎮座、

次舉諸火、

次正祝參進告遷御訖由於勅使勅使氣色、

次社司下殿着軒下座左右分頭、

次諸司設奉幣座於拜殿中央、

次勅使起座昇拜殿奉幣授禰宜禰宜傳幣帛於社務社務捧之參神殿役道供內



陣之後、下殿進、勅使座傍、申返祝詞、復座、

次勅使降拜殿、復着廊代座、

次社司昇殿、着座拜禮、

次供夕神饌、

此間樂人奏樂、

次撤神饌、

此間樂人奏樂、

次勅使起座、率史、史生、官掌退出、社司送勅使、於鳥居內、勅使氣色、

次諸司撤物具、訖退出、

次一社傳奏退出、

次神樂、於庭上奏之、

次社司閉御戸、

此間樂人奏樂、

次社司以下、各下殿退出、略

△中社祝秦公杓日記

文政五年十一月十日、正遷宮次第左之通、

一午刻比、伯侍從雅壽王御參向也、令入、休幕、暫時而奉行廣橋頭辨光成朝臣

被參向、

次入、鳥居給、社司一統出向、前行、於樓門外、手水氏人奉仕、入于休幕、給、

一戌半刻比、遷宮催社務以下、各着齋服、束帶、尋常下具各昇殿、假奉迎、社頭次第

○目代荷田有信日記

天保十年七月十日、拜殿模樣替、付、伯家、内願書差出ス、

奉願口上之覺

一當社拜殿之儀者、從往古神幸之節、奉成神輿、遷宮修行仕、其外勅使御參向、

并御祈勤行之御場所柄、候處殊之外、及大破、此度修覆相催候、付、何卒

御同列他之御社、御同樣折上組天井、并御所棟、俗稱獅子口等、從仙洞御所御寄



附被爲在候様奉願上候、當社者小知之事故、氏子之輩助成ヲ以、修覆萬端賄罷在候得者、氏子頭取之者より、一向歎願仕候、右御寄附被爲在候者追々出精御修覆造畢可仕奉存候、其上例年神幸之節、拜殿狹小ニ而、遷宮之進退不安萬一過失之程難計、恐入從來心配仕候間、此度修覆之序を以、南北建増之催仕度存候ニ付而茂、從御所方一廉之御寄附被爲在、他之御社御同様之御裝飾ニ相成候者、神威茂彌増造營無滯可成就仕候、一社一同永々安心、深難有畏奉存候、彌以國家靜謐玉體安穩之御祈、可抽丹誠候間、偏奉願上候、此等之趣、宜御披露被成下度、賴入存候以上、

亥七月

正官連名

伯少將殿

御雜掌中

八月三日、西御役所依召午刻出頭、目附方出會先達而願出候拜殿建繼之場所、昨日見分相濟、御奉行へ申上候處、願之通御聞濟之旨被申渡、請書差出、

○正祝秦公杓日記

天保十年九月十九日、拜殿先出來云云、

○社務所日誌

明治十三年四月九日、本殿以下(權殿、奥宮、神饌所、假社、務所、神供水井、戸屋形)修繕ヲ稟定ス、

同年六月九日、今度本殿以下營繕之事、叡聞ニ達シ、金百圓下シ賜ハル、宮内省御達左ノ如シ、

稻荷神社

宮司

其社神殿以下修繕相企候趣被聞食金百圓下賜候事

明治十三年六月九日 宮内省

同年九月十五日、奥宮假遷宮、

十四年一月廿一日、奥宮正遷宮、

式次第



本日正午、神殿以下裝飾ス、

先本殿前ニ祓ノ座ヲ設ク、

次祓ノ詞ヲ讀、

次太麻行事此儀先奥宮内陣以下ニ祓ヲ次神饌ヲ祓フ次宮司以下一同ヲ祓フ

次宮司昇殿開扉、

次宮司祝詞ヲ奏ス、

祝詞

掛卷母 恐伎 稻荷神社奥宮大神 乃 大前爾 宮司正七位近藤芳介恐美 恐母  
白左 往志 明治十三年九月十五日 爾 御殿乎 修米 繕比 奉良 爲豆 此 乃 本  
津大宮爾 遷志 坐世 奉利 爰爾 此一月廿一日 爾 至利 御殿修米 繕比 奉利 畢  
奴 故今日 乃 生日 乃 足日 爾 慎敬比 還志 鎮米 坐世 奉留 事乎 聞食止恐美 恐母  
美 白 須

明治十四年一月廿一日

次主典昇殿前ノ翠簾ヲ垂、

次御正體ヲ辛櫃ニ納、

次卷簾、

次出御主典一名太麻ヲ取テ御先導主典二名辛櫃ヲ奉昇附屬ノ辛櫃常備二名奉昇

此間御行列、

次宮司奥宮開扉、

次辛櫃ヨリ奉出安鎮シ奉ル、

次閉扉、

次神饌ヲ供ス、

次宮司祝詞ヲ奏ス、

祝詞

掛卷母 恐伎 稻荷神社奥宮大神 乃 大前爾 宮司正七位近藤芳介恐美 恐母  
白左 今日 乃 此日 爾 本 乃 御殿 爾 還志 鎮米 坐世 奉利 大前 乎 持齋利 波 慎敬



比奉留御食波和稻荒稻爾御酒波甕上高知甕腹滿並豆鱸乃廣物鱸乃狹  
物奧津藻菜邊津藻菜甘菜辛菜爾至留麻置足波志仕奉留事乎平久良氣安  
久良氣聞食豆彌遠長爾鎮利坐世白須事乎聞食世恐美恐母美白須

明治十四年一月廿一日

次官司拜禮

次禰宜以下拜禮

次神饌ヲ撤ス

次各退出

次直會

同年三月廿五日假殿遷宮式執行京都府少書記官谷口起孝參向其式左ノ如  
シ、

假遷宮次第

當日早旦本殿及權殿ヲ裝飾ス、

其儀本殿裝飾常ノ如シ權殿ハ内外ヲ清メ殿ノ入口ニ簾ヲ懸ケ神座ヲ設  
ケテ外面ニ注連ヲ引ク、

午前十時官司以下幄舎ニ着ク、

次地方官社頭ニ參向シ幄舎ニ着ク、手水ノ儀アリ

次官司本殿ニ昇リ御扉ヲ開ク、

此間奏樂

次官司祝詞ヲ奏ス、

祝詞

掛卷母恐伎稻荷神社乃大前爾官司正七位近藤芳介恐美恐母美白久左此乃御  
殿乃損留我故爾修米繕比奉止良牟爲故今日乃生日乃足日爾假宮爾遷志坐  
世奉良牟止献留禮代乃幣帛乎平久安久所聞食豆漏事无久落事无久事取  
令奉仕給止閉恐美恐母美白須

明治十四年三月廿五日



次遷座

其儀、官司御正體ヲ辛櫃ニ納メ奉リ、主典二名昇奉ル、其餘ノ主典以下前  
後整列ス、此間地方官、權殿前ノ幄舎ニ移リ着ク、

次權殿開扉遷座、畢テ官司側ニ候ス、

此間奏樂、

次禰宜以下神饌ヲ傳供ス、

此間奏樂、

次官司祝詞ヲ奏ス、

祝詞

掛卷母恐伎稻荷神社乃大前爾官司正七位近藤芳介美恐美白左今日乃  
此乃日爾此乃假宮爾遷志坐世奉利大前乎持齋麻波波御食御酒魚菜種種乃  
物乎置足波志奉留事乎平良氣安良氣聞食豆暫乃間穩爾鎮利坐止恐美恐美  
母美白須

明治十四年三月廿五日

次地方官、玉串ヲ獻リ拜禮

次官司、玉串ヲ獻リ拜禮、畢テ本所ニ復ス、

次禰宜以下拜禮、

次神饌ヲ撤ス、

此間奏樂、

次官司、御扉ヲ閉ツ、畢テ下殿幄舎ニ復ス、

此間奏樂、

次退出、

十五年四月十五日、今日、本殿上棟祭執行、其式次第左ノ如シ、

一 早旦、各祭場裝飾

午前第九時、官司以下各舊教院ニ、區長以下社務所ニ參集ス、

十時、棟梁以下整列シテ教院ニ至リ、新始祭場検査ヲ普請奉行ニ乞ヒ、官司以



下ヲ該場ニ先導シ、各順次標示ノ所ニ立列ス、  
次棟梁地祭ノ式ヲ行フ、

次官司祝詞ヲ奏ス、

次官司以下整列シテ拜殿ニ着床、此時奏樂方、權殿階下ニ着座、

次持込役、棟木ヲ表鳥居ヨリ肩昇シ、樓門ニ入り、拜殿ヲ一周シテ、中門ヲ經、  
始祭場ニ到リ、便宜ノ所ニ置ク、脇棟梁以下、拜殿ニ進ミ、其旨普請奉行ニ告  
グ、奉行之ヲ官司ニ報ズ、

次官司以下、權殿ニ進ミ、神官ハ階上、區戸長及普請奉行ハ階下、營繕掛、并諸講  
社ハ南庭、棟梁以下ハ北庭、各標下ニ着ク、

次神饌ヲ供ス、

此間奏樂、

次官司祝詞ヲ奏ス、

次同官、玉串ヲ奉リ拜禮、

次禰宜以下拜禮、

次神饌ヲ撤ス、

此間奏樂、

次棟梁以下、鉦始祭場ニ進ミ着床、

次官司以下着床、

次棟梁以下、祭具ヲ傳供ス、

此間奏樂、

次常備起テ、棟梁ヲ官司ノ前ニ誘導ス、

次主典賞文ヲ朗讀シ、官司ニ代リ直垂及ビ烏帽子ヲ執リ棟梁ニ與フ

次脇棟梁へ賞與順序前項ノ如シ、

次棟梁、脇棟梁トモ、直垂ヲ着ク、起テ祭式ヲ始ムルコトヲ官司以下ニ報道ス、

次鉦始ノ式ヲ行フ、

次官司以下、上棟祭場ニ登リ着座、



次棟梁以下、祭具神饌傳供、

此間奏樂、

次上棟ノ式ヲ行フ、

次官司起テ祝文ヲ朗讀ス、

次宮本組祝文ヲ朗讀ス、

次投餅投錢、各退出、

五月一日、正遷宮式執行、京都府大書記官國重正文參向、祭典式左之通、

一正午十二時本社前拜瑞垣内ニ於テ祓ノ式ヲ行フ、神寶祓ノ式ヲ行ヒ、祓ノ辭ヲ奏ス、畢テ神官其他祭典關係ノ人ヲ祓フ、

一齋主官司、奉遷司禰宜、奉戴官主典、同手扶宮本組、

奉遷式

豫テ本殿權殿トモニ、拜殿ヲ以テ幄舎ニ充テ、渡御ノ道筋左右ニハ、境界ノ竹埒ヲ設ケ、權殿、及ビ兩馬場先鳥居ノ左右ニ、木綿櫛ヲ結附ケ、本殿ヨリ樓門、權

殿ヨリ幄舎迄ノ間ニハ、忌竹ヲ凡ソ二間毎ニ立テ、注連繩ヲ引周ラシ、薦ヲ敷延ス、

本日早旦、兩殿トモ内外陣裝飾次ニ本殿、及ビ樓門ノ前庭左右ニ眞櫛ヲ樹テ、拜殿ニハ、四隅ノ柱ニ木綿櫛ヲ結附ケ、幕ヲ張回ラシ、中央ニ御辛櫃假案五脚ヲ据ウ、

次第

本日午前第九時報鼓、各整服ス、

第十時報鼓齋主以下、各整列シテ祓所ニ進ミ、祓ヲ修ス、竟テ退出、

午後第一時報鼓、前列齋者以下御太刀以上、社務所前庭ニ進ミ、各標下ニ着床、次四神旗、御翳、鳳鳥、御錦蓋、及ビ區戸長、五箇郷營繕掛、諸講社總代ハ、權殿前庭左右ニ進ミ、各標下ニ着ク、

次御菅蓋、及ビ神馬ハ、社務所前石壇上ニ進ミ、各標下ニ並列ス、

次警蹕以下後列樂人、權殿ニ進ミ、各標下ニ着ク、



次齋主以下、帷舎ニ進ミ着床、

次地方官、帷舎ニ進ミ着床、手水ノ儀アリ

次齋主以下昇殿着座、

次齋主御扉ヲ開ク、

此間奏樂、

次神饌ヲ傳供ス、

此間奏樂、

次齋主祝詞ヲ奏ス、

次齋主玉串ヲ奉リ拜禮、

次奉遷司以下拜禮、

次神饌ヲ撤ス、

此間奏樂、

次神饌案ヲ撤却ス、

次贊者起テ前列贊者ニ行進ヲ告ゲ、供奉ノ位地ニ進ム、

次道樂ヲ始ム、

次出御、

先下社、

其儀齋主内陣ニ進ミ、御正體ヲ御辛櫃ニ納メ奉ル、奉遷司之ヲ助ク、

次奉遷司御弓筋ヲ執リ奉戴官ニ傳フ、奉戴官之ヲ階上ヨリ神寶奉持者ニ渡

ス、奉持者之ヲ奉シテ行列ノ位地ニ立ツ、

次齋主御劔ヲ奉出ス、奉遷司執テ奉戴官ニ傳フ、奉戴官階ヲ下リテ神寶奉持

ノ巫子ニ渡ス、巫子之ヲ奉シテ行列ノ位地ニ立ツ、

次奉遷司及ヒ奉戴官、御辛櫃ヲ内陣ヨリ奉出シ、階上ニ於テ奉戴官手扶ニ渡

ス、手扶昇奉リテ行列ノ位地ニ進ム、此時御錦蓋ヲ御辛櫃ニ覆ヒ奉リ、御翳、

鳳鳥ハ其錦蓋ノ前ニ立テ、奉戴官ハ直ニ供奉ノ位地ニ進ム、

次遷幸、



此間奏樂

次中社、

次上社、

次田中社、

次四大神、

其儀皆下社ノ如シ、唯中社ノミ、御辛櫃ノ後ニ神面、并命婦ノ從フアリ、  
次齋主、奉遷司、典禮供奉ノ位地ニ進ム、

次地方官、本殿前庭標下ニ着床、

前列既ニ樓門内ニ入レバ、拜殿北方ヲ廻リテ、前列贊者前驅、及ヒ賢木持、樂  
人、贊者ハ、前拜標示ノ所ニ着床、錦大旗ハ中門上左右ニ、白杖、四神旗、并錦小  
旗ハ、本殿前庭左右ニ並列シ、宮本組總代、八乙女ハ南庭、神寶ハ北庭、各標下  
ニ着床、此時典禮、歩ヲ進メテ拜殿ニ先着ス、

次拜殿へ入御、

下社御辛櫃ヨリ順次假案ニ奉置シ、警蹕以下各側ニ着床、此時區戸長、五箇  
郷營繕掛總代ハ、本殿前、御錦蓋ハ、中門下、各標下ニ着ク、

次齋主、奉遷司、及ヒ後列樂人、贊者ハ、拜殿ニ着床、此時菅蓋ハ拜殿西庭ニ、神馬  
ハ樓門下、標下ニ並列ス、

次齋主、奉遷司、本殿ニ進ミ昇殿着座

次本殿、并拜殿着床ノ樂人齊シク奏樂ヲ始ム

次出御

既ニ本殿ノ前庭ニ至レバ、警蹕、太玉串、道敷鹽水、各標下ニ立列ス、

次入御

先下社

其儀、奉戴官、御弓箭ヲ執テ、階下ヨリ奉遷司ニ渡ス、奉遷司之ヲ奉シテ御扉  
ノ側ニ供ス、此時御弓箭奉持者標下ニ着ク、以下ノ諸司之ニ同シ、

次奉戴官、御劔ヲ奉シテ昇殿、奉遷司ニ渡ス、奉遷司執テ齋主ニ傳フ、齋主之ヲ



内陣ニ納ム、

此間奏樂

次奉遷司及ヒ奉戴官殿ヲ下リ御辛櫃ヲ奉シテ昇殿内陣ニ入ル

次御鎮座

齋主奉遷司仕奉ル、

次中社

次上社

次田中社

次四大神

其儀皆下社ニ同シ

次齋主及ヒ奉遷司下殿側ニ伺候ス、

次典禮本殿ニ進ミ着床

次神饌ヲ傳供ス

此間奏樂

次玉串案ヲ据ウ

次齋主進ミテ祝詞ヲ奏ス

次地方ノ長官玉串ヲ献リ拜禮

次同官員拜禮

次齋主玉串ヲ献リ拜禮

次奉遷司以下拜禮

次區長拜禮此時總員齊シク立拜

次玉串案ヲ撤却ス

次神饌ヲ撤ス

此間奏樂

次齋主御扉ヲ閉ツ竟テ幄舎ニ復ス











○御錦蓋  
直直直直  
垂垂垂垂

○奉戴官  
○奉戴官  
○奉戴官  
○奉戴官  
手手手手  
扶扶扶扶  
直直直直  
垂垂垂垂

上社  
○御辛櫃

○奉戴官主典  
衣淨

○御弓箭  
垂直

○御劔巫子  
早千

○御錦蓋  
直直直直  
垂垂垂垂

○奉戴官  
○奉戴官  
○奉戴官  
○奉戴官  
手手手手  
扶扶扶扶  
直直直直  
垂垂垂垂

田中社  
○御辛櫃

○奉戴官等外  
衣淨

○御弓箭  
垂直

○御劔巫子  
早千

○御錦蓋  
直直直直  
垂垂垂垂

○奉戴官  
○奉戴官  
○奉戴官  
○奉戴官  
手手手手  
扶扶扶扶  
直直直直  
垂垂垂垂

四大神  
○御辛櫃

○奉戴官等外  
衣淨

○齋主官司  
服齋

○奉遷司禰宜  
衣淨

○典禮主典  
衣淨

○大太鼓  
白白丁丁

○樂人  
垂直

○樂人  
垂直

○同  
垂直 ○同  
垂直

○同  
垂直 ○同  
垂直

○區長

○戸長

○同  
垂直 ○同  
垂直

○同  
垂直 ○同  
垂直

○營繕掛總代

○戸長

○同 ○同

○同 ○同

○五ヶ郷總代

○同

○同 ○同

○御翳  
丁白

○鳳鳥  
丁白

○御菅蓋  
白白丁丁

○同  
白白丁丁 ○同  
白白丁丁

○舍人

○神馬  
鞍唐

○舍人

○神馬  
鞍唐

○舍人

○神馬  
鞍唐

○舍人

○神馬

○舍人



○神馬

○列養者 垂直

○官幣大社稻荷神社明細圖書○圖

一本社建築年度及由緒

天正十七年八月、秀吉公ノ御沙汰ヲ以テ造營セラレ、今ノ本殿ハ此時ノ儘ナリ、

古昔ヨリ造營修繕等、舊記ニ散見スル所ヲ以テ左ニ記ス、

一延喜八年八月、贈太政大臣藤原時平公執舉、始テ三箇社ヲ造營、

一文治三年八月廿六日、鎌倉將軍御沙汰ヲ以テ、下社中社上社正殿諸神殿造營、

一寛元四年二月廿三日、上下殿造營、

一元祿七年十一月、關東御沙汰ヲ以テ修覆、

一文政五年十一月、官府御沙汰ヲ以テ修覆、

維新後官費

攝社末社諸建物、維新前總テ本社ニ同シ、維新後ハ御成規之通、

一權殿若宮殿トモ稱ス

一奥宮上御殿トモ稱ス

一建築修營年度、本殿ニ同シ、

○稻荷社事實考證記

一天正十六年九月十七日、三神主并竈目代等定、當社諸屋形書付如左、

稻荷大明神

一本社 燈付常六

一南若王子

一日吉

一北若宮 興再

一御料殿

一日御供 興再

一竈殿 興再

一樓門二 興再

一寶藏 興再

一神輿假屋 裝付御束

一鳥居三箇所 興再

一猛尾社 興再

一天王社 興再

一熊野權現

一辨財天 大鼓五



- 一 上之御殿 付廻廊 再興
- 一 荷田神
- 一 大師堂
- 一 伊勢八幡 再興
- 一 三之御山末社等 再興
- 一 拜殿
- 一 寬文十二子年諸屋形書付
- 一 御本殿五社相殿 ケヲチコシナカシ行五間五尺寸、ハリ行五間五寸、
- 一 若宮五社相殿 ケヲチコシナカシ行四間、ハリ行三間三尺六寸、
- 一 御供所 東西三間 南北二間
- 一 大黒天堂
- 一 上之御殿相殿三座 ケヲチコシナカシ行二間四尺五寸、
- 一 奧命婦社 カスカ造、ケヲチ行一間、ハリ行二間、
- 一 奧之命婦
- 一 神樂所
- 一 塔婆 再興
- 一 御廐 再興
- 一 田中社末社
- 一 姪子社
- 一文殊堂
- 一 御本地堂 再興
- 一 長者殿
- 一 鳥居等
- 一 辨財天堂
- 一 御興假屋 東西五間五尺二寸、南北二間四尺、

- 一 神樂所 東西一間三尺五寸、南北二間半、
- 一 大師堂
- 一 樓門 ケヲチ行五間半、ハリ行二間半、
- 一 荷田社
- 一 熊野權現社
- 末社不及一間之小社并退轉之社等、梁行桁行不載之紙面者也、
- 一 長者社
- 一 姪子社
- 一 菟藝泥赴 四ノ上
- 一 稻荷社
- 御料殿 遷宮之假殿 拜殿 御廐 御神樂所 神興假殿 寶藏 樓
- 門二所 鳥居すべて三所
- △山州名跡志 十二紀伊郡
- 一文殊堂
- 一 拜殿 キリツマ作、四間四方、
- 一 鳥居 柱ノ内ノリ、三間、
- 一 正八幡宮
- 一 伊勢両宮
- 一 藤尾社
- 以上
- 一 日吉社
- 一 若王子社
- 一 影向社



稻荷宮 鳥居西向、木柱丹塗、凡當國木柱鳥居中是其第一也。

樓門向西 拜殿同

神殿同 若宮

在本殿北西向 辨財天堂 在本殿前北向 大黑天堂 在本殿前南向

○稻荷社事實考證記

一元祿七年御修理以後當時諸屋形

一御本殿五座相殿表五間五尺二寸、奧行四間六尺五寸、并御拜所、表三間三尺四寸、

一拜殿梁行四間、桁行四間、但左右ニ三十六歌仙掛ケリ、近衛准后家照公ノ御梁筆也。

一樓門云、太加止乃、梁行二間二尺五寸、桁行四間五尺、

一若宮殿行三間三尺四寸、奧行三間三尺四寸、

一神樂所又云、舞殿。

一神供所外廂二間、桁行八間、

一神輿假屋有神輿五基、梁行二間四尺四寸、桁行五間三尺五寸、

一寶藏又云、神庫、梁行二間、桁行二間半、廂七尺二寸、

一上之御殿三座又云、奧之御殿、又俗云、命婦社、表三間三寸、奧行二間四尺五寸、

一白狐社元來命婦社是也、表七尺二寸、奧行一丈二尺五寸、

一長者社又鴨社、表四尺二寸、奧行六尺、

一荷田社又云、龍頭太社、表三尺、奧行四尺、

一五座相殿梁行四尺、桁行一丈、中央若王子、左日吉、右猛尾、東八幡、西蛭子、

一兩宮表五尺、奧行三尺五寸、 一藤尾社又云、崇道天皇社、表二尺四寸、

一熊野社表二尺六寸、奧行三尺三寸、

一繪馬掛所二ヶ所、廻廊也、梁行一間半、桁行延十間、

一繪馬納所梁行二間、桁行三間、 一手水屋形所二ヶ 一鳥居所二ヶ

諸堂

一辨財天作者友信

一大黑天作者康清

一弘法大師作者康勝

一文殊作者花盛

△稻荷神社古文書

寺社奉行裁定條目

一繪馬之事

今度繪馬掛所、新規令出來候間、此所ニ繪馬掛可申候社頭、其外ニ一切打申